

玉虫厨子の建築様式年代を

白鳳末期と見做すことは出来ない

——村田治郎博士の御説に重ねて疑義を呈す——

上 原 和

は し が き

このたび、村田治郎・上野照夫両氏共著の「法隆寺」(写真 佐藤辰三 毎日新聞社 昭和三五、七、二〇)の刊行を見たことは、法隆寺の諸芸術を愛するもののひとりとして、まことに慶びに堪えないところである。

とくに、目下、法隆寺系建築との比較において、玉虫厨子建築の様式年代を論考している私にとって、同著における村田治郎博士の法隆寺建築に関する御説は、私の久しく待望してやまなかつたものである。ここに、同書所収の「法隆寺伽藍史」及び「法隆寺の建築」における、博士の最新の御説に接し、種々御教示をうけることが出来たことを、深く感謝する次第である。

さて、村田博士は、その新著において、法隆寺建築に関する諸先学の研究を、系統的に俯瞰し、かつ批判なさるとともに、博士御自身の旧説をも、あえて更新なされ、そこに、注目すべき問題の提起を行っていられるが、本稿においては、とくに、玉虫厨子の制作年代を、白鳳末期に擬していられる、博士の御説に対して、私の疑義を述べたいと思う。

なお、それに先立ち、このたびの博士の御論考において、旧来の御説には見られなかつた、もっとも注目されるべき、二つの問題について、即ち、

- (一) 法隆寺金堂の完工年代を、天武朝の初年と見做している点、
- (二) 法隆寺系建築を、様式史的には、一応、宏義の白鳳様式と認めている点、

この二つの御説について、まず検討を進めて行くことにする。

なぜならば、王虫厨子の制作年代の解明も、しよせん、法隆寺建築自体の問題解明を俟つことなしには、なにごともしえないからである。

一、法隆寺金堂の天武朝初年完工説について

法隆寺金堂の再建年代に關して、村田博士は、新著のなかで、次のように述べていられる(註二)。

「法隆寺の建築のうちで細部の様式が一番古いのは金堂であつて、五重塔や中門とのあいだに餘ほど年数の開きを感じしめる。そこで金堂だけが早く完成して、しばらく工事が中絶していたと見なすことができれば、説明に好都合なのである。福山敏男説が金堂だけを孝徳朝におこうとしたのも、食封三〇〇戸下賜と様式の古さとが大きな理由だったといつてよい。そんな理由から、火災を天智九年におくばあいは、金堂の工事を食封停止(六七九)以前と推定したくなるのである。おそらく天武朝の初年には、金堂(裳階をのぞく)の工事が一応終つていたかと想像する。天武朝に繡帳が二帳も施入されたのは、それと結びつくものだろう。」(傍点筆者)

このように、村田博士は、法隆寺金堂の完工年代を、天武朝初年に擬していられるわけであるが、恐らく、法隆寺の再建を、天智天皇九年(六七〇)の罹災以降とする当今の諸説のなかでは、この村田説が、いちばん年代が早いことになる

であろう。

なお、ここで注意しておかねばならないのは、この天武朝初年が、再建金堂の着工年代ではなく、完工年代に擬せられている点である。着工年代に關しては、

「天智天皇九年(六七〇)四月三十日夜半に全焼した斑鳩寺は、再建の場所の問題でしばらく足ぶみをしたが、やがて妥協がなりたつて現在地に工事がはじめられたらしい。そのころの斑鳩寺は、天平十九年(七四七)に所有した田地や山林(『法隆寺流記資財帳』)からの類推によれば、経済的にかなり豊かであつたようだから、いつまでも再建しないでおくことは許されなかつたと思う。ただ政治の世界で、翌年末に天智天皇がなくなり、それに続いて壬申の乱があつたので、二―三年の空白があつたかも知れない。」

と述べていられる。即ち、法隆寺金堂の着工年代を、博士はこの点にも、重ねて注意を払つておきたいと思う。

法隆寺金堂の再建年代については、再建非再建論争当時の和銅再建説を、もはや問題外とすれば、現在のところ、久野健氏の次の見解が(註三)、概ね、最近の一般の説の代表をなすものと見て差支えないであらう。

「薬師寺金堂葉師三尊と金堂壁画との關係や、金堂壁画、天井板文様と五重塔壁画及び天井文様の關係や顔料等の考察から、金堂建築は、天武・持統朝頃から長時間かかつて造営され、塔や中門は、それよりおくれ、これも和銅年間頃には

完成したものであろうと想像している。」

久野氏は、法隆寺昭和修理以降の、新資料にもとづく絵画様式の比較に立って、金堂建築の着工年代を、きわめて慎重に天武・持統兩朝という長い期間に据えていられるわけであるが、天武朝初年から持統朝末年までは、およそ四分の一世紀のひらきがある以上、やはり、再建金堂の着工乃至は完工の年代に關して、久野氏の説に、より限定された年代が望れてくるのは、当然といえよう。

私自身の見解をいえば、法隆寺の再建金堂の着工年代を、罹災後間もなくとする村田博士の御説には、賛成であるが、その完工時代を、天武朝初年に擬する点には、いささか疑問なしとしないのである。法隆寺の再建年代に關しては、すでに、昨年の五月、本誌一八号所収の拙論(註三)において、かなり詳細に、問題の論証につとめているので、ここでは簡略に、およその見解のみを述べて、博士の御説に対する賛同、乃至は疑義としたいと思う。

これまで、法隆寺の再建年代が、きわめて遅い年代に推定せられてきた理由の一つは、上宮聖徳太子伝補闕記に見えて、次の記載によるものであった(註四)。

斑鳩寺被災之後。衆人不_レ得_レ定_ニ寺地_一。故百濟入師率_ニ衆人_一合_ニ造_ニ葛野蜂岡寺_一。令_ニ造_ニ三川内高井寺_一。百濟闕師。圓明師。下水君雜物等三人合_ニ造_ニ三井寺_一。

これは、補闕記に拠ったものであるが、聖徳太子伝曆にも(註五)、これと略々同様の記載が見えている。こうした記

載が、今日残されているために、ともすれば、法隆寺の再建は、かなり遅くまで放棄されていたものと速断され勝ちであった。しかし、ここで注意すべきは、「斑鳩寺被災之後、衆人不_レ得_レ定_ニ寺地_一」という一行は、「災_ニ法隆寺_一、一屋無_レ餘」(日本書紀天智天皇九年条)という斑鳩寺被災の惨状をまねにして、茫然自失、為すところなく四散してゆく衆人の有様をえがきえて妙であるが、「不_レ得_レ定_ニ寺地_一」ほどの自失の状態が、何時まで続きたかについては、何ら、示されえていないのである。にわかの変事による、人びとの自失の状態と混乱は、時がたてば、おのづから平常に復するものであるとすれば、法隆寺の再建工事も、間もなく、平静をとり戻した法隆寺有縁の人びとによって、着々と進捗されたと見るのが、もっとも自然な見方ではないであろうか。法隆寺の寺格と、その人的、物的背景から考えてみても、法隆寺の再建が寺地も定めざるままに、十数年も放置されるということは、少くとも常識では考えざるどころといえよう。

それゆえ、再建金堂の着工年代を、きわめて早い時期におく、村田博士の見方については、私も確かに賛成であるが、しかし、いくら早いといっても、その完工年代を、天武朝初年におくほど、金堂の造営工事が、罹災後すみやかに着工され、また、たちまちに進捗していったものとは、到底考えられないのである。天武天皇元年(六七三)は、法隆寺の天智天皇九年(六七〇)罹災の僅か三年後である。完工年代に、二、三年の振幅をみるとしても、この間に、焼失伽藍跡の整

理、新しい寺地の選定、寺地の地ならし、再建伽藍の諸種のプラン、そしていよいよ具体的な金堂の造営工事と考えてくると、やはり、金堂の完工年代を、天武朝初年に遡らせるのは、かなり無理があるように思われる。

私は、ここで、上宮聖徳法王帝説の裏書に詳述されている山田寺（浄土寺）の建立記録を参照しておきたいと思う。いま金堂の造営期間を見る上で、必要な個所のみを、帝説から引用すると（註六）、

有本云。誓願造_レ寺。恭敬三寶。十三年辛丑春三月十五日。始_二浄土寺_一云云。

注云。辛丑年。始平_レ地。癸卯年。立_二金堂_一云云。戊申。始僧住。

と記録されている。

即ち、山田寺の建立にあつては、まず舒明天皇一三年（六四一）に、造寺着工の手はじめとして、寺地の整備が行われ次いで、皇極天皇二年（六四三）に、金堂の造営工事が始まり、それから五年目の大化四年（六四八）に始めて僧の居住をみたというのである。この「始僧住」をなんと解釈するかは問題であるが、これを金堂の落慶と見做しておく、このように、一応法要が営みうるまでに金堂が出来上るのには、寺地が定つてから七年、金堂の造営が始められてから五年の期間を要したことになる。法隆寺の金堂の場合も、恐らくこの年月とさほど大差はなかったものと考えてよいであろう。

いま、法隆寺金堂の再建に、この山田寺の例をあてはめて

みるべく、かりに、再建法隆寺の寺地が、はやくも罹災年（六七〇）の年内に決つたと想定しても、金堂の造営工事が一応完工をみるのは、天武天皇五年（六七七）ということになる。ましてや、村田博士のいわれるように、罹災の「翌年末に天智天皇がなくなり、それに続いて壬申の乱があつたので、二三年の空白があつたかも知れない。」とすれば、なおさらのこと、金堂の完工年代を、天武朝初年に擬する、村田博士の御説には、やはり若干の無理があることは、否定できないであろう。

では、村田博士は、いかなる積極的な根拠にもとづいて、法隆寺金堂の完工年代を、天武朝初年に擬していられるのであろうか。博士は、己卯年における、法隆寺の食封停止をあげていられる。しかし、この問題に対する博士の扱い方にはいくらか誤りが認められるので、その点を次にただしておきたい。

己卯年の食封停止というのは、云うまでもなく、天平十九年二月十一日に勅録された、法隆寺伽藍縁起并流記資財帳に見えている（註七）、

合食封参佰戸

右、本記云、又大化三年歲次戊申九月廿一日己亥、許世徳随高臣宣命納賜、己卯年停止

の記載によるものである。

大化三年（六四七）孝徳天皇の勅によつて、旧法隆寺に食封三百戸が納賜されたが、その後、己卯年、即ち天武天皇七

年（六七九）に至って停止されたというのである。

旧法隆寺の焼失を、皇極天皇二年（六四三）に擬し、その再建年代を孝徳朝（六四五より六五四まで）に据えている福山敏男説（註八）は、大化三年における食封三百戸下賜を、法隆寺再建のためのものと見做したわけであるが、法隆寺の天智天皇九年（六七〇）罹災説が、根本的に覆えらぬかぎり法隆寺の孝徳朝再建について考えることは、まず不可能といえる。

さて、ここで、食封の己卯年停止が、法隆寺金堂の完工年代を推定させる、十分の証左になりうるか否かであるが、その点について、村田博士は、次のように述べていられる（註九）。

「己卯年をどこにおくかが問題だろうが、通行の『日本書紀』に天武八年（庚辰）四月乙卯（五日）『もろもろの食封がある寺をしらべてみて、加える必要のある寺は加え、やめてもよい寺にはやめよ』という詔があったとあるのに結びつける説が適切だろう。食封三〇〇戸といえ、かなり大きな財源であるから、現に、再建工事を盛んにやっていたとすれば、まさか停止されることはあるまい。」

この推測は、概ね妥当であるが、ここで博士が、「己卯年をどこにおくかが問題だろうが」と、甚だ自信のない云い方をされているのには、いささか理由が見られる。というのは己卯年は、明らかに天武天皇七年（六七九）を指すわけであるが、この己卯年停止の裏付けとなるべき筈の、

夏四月辛亥朔乙卯、詔曰、商_下量諸有_二食封寺所由_一、而可_レ加加之、可_レ除々之。是日定_二諸寺名_一也。

という記録は（註一〇）、日本書紀では、天武天皇八年四月五日の条に、記されているからである。思うに、この一年のうちに、博士は困惑なされたように見受けられる。なぜならばこのように、天武天皇の食封商量の詔が、法隆寺の食封が停止された年よりも、一年遅れているものとすれば、その前後関係からして、法隆寺の食封停止を、天武天皇の詔によって法隆寺の「寺所由」が十分に商量された上での措置と見做すわけにはゆかなくなるからである。

ここで私は、法隆寺の食封停止と、天武天皇の食封商量の詔との関係について、私見を述べ、さらに、村田博士の年代錯誤を指摘しておきたいと思う。

壬申の乱後、天武天皇は、徹底した天皇親政を期するために、次々と詔を下して、旧制度につながる諸般の絆を断ち切ってゆくのであるが、これまで行われてきた諸大寺への食封に対して、再検討を命じた食封商量の詔も、その一つの現れといえるわけであり、法隆寺における己卯年の食封停止も、この天武天皇の詔にもとづいて行われた措置であったことは、十分に推察しうるところである。それゆえ、博士が、日本書紀の天武八年の条に依拠して、法隆寺の食封停止がなされた己卯年（天武天皇七年）の翌八年に、改めて諸大寺に対する食封商量の詔がなされたというのでは、前後関係が反対になるのである。

では、博士の御説における食封商量の詔の発布年と、法隆寺食封停止年との前後関係の矛盾は、どのように考えられるべきであろうかが、次に問題となる筈である。

そこで、とくに、ここで、指摘しておかなくてはならないことは、食封商量の詔のあった日本書紀紀年の天武天皇八年は、じつは、法隆寺資財帳に記されている食封停止の己卯年即ち、天武天皇七年（六七九）と、全く同じ年を指すものであるという点である。なぜならば、日本書紀の天武天皇紀元年に数えているので、実年数より、日本書紀の天武天皇紀元の方が、一年づつ多くづれていいるからである。そのづれを看過したために、博士は、「通行の『日本書紀』に天武八年（庚辰）四月乙卯」（傍点筆者）と、わざわざ天武紀の八年を庚辰年と見立てる誤りを犯さざるをえなかったのである。この日本書紀紀年の天武八年の干支は、いうまでもなく己卯年にはかならないのである。

それゆえ、日本書紀における食封商量の詔の発布年も、法隆寺伽藍縁起并流記資財帳における法隆寺の食封停止年も、ともに己卯年の天武天皇七年（六七九）であり、法隆寺の食封停止が、この食封商量の詔にもついでなされたであろうという推察は、ここに矛盾なく成立することになり、法隆寺の食封停止には、金堂の再建進捗状況が、やはり商量されていたであろうことは、十分に考えられるところである。

また、博士は、「天武朝に繡帳が二帳も施入されたのは、

それと結びつくものだろう」として、法隆寺金堂の天武朝初年完成の傍証としているが、この繡帳は、やはり、法隆寺伽藍縁起并流記資財帳にみえている（註一一）

合通分繡帳式帳 帶廿二条 鈴三百九十三

右、納賜淨御原御宇 天皇者

という記載の、繡帳式帳を指すものであろう。私も、かつて自説において、天武天皇が、法隆寺へ、繡帳式帳を納賜なされているこの一条を指摘し、己卯年の食封停止の一条ととも、法隆寺金堂の落慶を天武朝年間と目する手だてとしたことがあるので（註二二）、勿論この点については異存なしであるが、何分、この繡帳は納賜年未詳なので、この繡帳納賜の記録のみをもってしては、金堂の完工年代を、天武朝の初年に限定するわけにはゆかないであろう。

要するに、私としては、法隆寺金堂の完工年代を、天武朝におくことには、賛成であるが、これを天武朝初年と限定することに、疑義が残るのである。

では、私自身は、法隆寺金堂の完工年代を、どのように推定しているであろうか。

すでに、私は、本誌一八号掲載（昭和三四、五、二〇）の拙稿において（註二三）、

「私の結論とする処は、要するに天武朝の半ばには、法隆寺金堂の再建は、略々成っていたということである。」

と述べておいたのであるが、その推定に、変更をきたさざるをえない事情は、いまだ生じてはいないようである。村田博

士の御説によって、かえって、私の提起する法隆寺金堂天武朝再建説も、ようやくここに、有力な支持をうる結果になったものと思われる。

(註一) 村田治郎「法隆寺伽藍史」(「法隆寺」所収 昭和三五、七、二〇)二二頁

(註二) 久野健「法隆寺の彫刻」(昭和三三、四、一五)五七頁
なお、同氏の「白鳳文化」(日本歴史講座第一巻所収

昭和三三、六、一五)二〇七頁より二一一頁まで参照

(註三) 拙稿「玉虫厨子制作年代考」(「文献上より見た玉虫厨子の制作年代について」(「成城文芸」一八号 昭和三四、五、二〇)

(註四) 高橋順次郎・望月信享共編「聖徳太子御伝叢書」七頁

(註五) 前出 四一頁

(註六) 同 四三頁

狩谷望之証註、平子尚補校「上宮聖徳法王帝説」(「岩波文庫版」一三二頁

(註七) 「大日本古文書」(一) 六二二頁

(註八) 福山敏男説については、既出「法隆寺伽藍史」一七頁参照

(註九) 既出「法隆寺伽藍史」二二頁

(註一〇) 武田祐吉校註「日本書紀」六(日本古典全書 昭和三

二、六、三〇)七九頁

(註一一) 既出「大日本古文書」(一) 五九六頁

(註一二) 既出「玉虫厨子制作年代考」(「文献上より見た玉虫厨子の制作年代について」一六頁

(註一三) 前出 一九頁

二、法隆寺建築の白鳳様式説について

村田博士の新著において、これまでの御説を更新するものとして、注目されてよいのは、従来、ひさしく飛鳥様式として目されてきた法隆寺様式を、はっきり、広義の白鳳様式に属するものとして、云い切っていられる点である。これまでたびたび、博士の旧来の様式史観に疑義を呈してきた私としては、欣びにたえないところである。

まず、次に、新著の説を、村田博士のこれまでの諸論考と比較し、その新たな特色について検討してみたいと思う。

最初に、奈良朝以前の上代建築史は、はたして如何なる観点から、その様式史的時代区分がなされるべきであろうか、という問題であるが、この点について、博士は、かつて「法隆寺建築の様式」(昭和二四、一〇、一)のなかで、次のように論じていられる(註一)。

「われわれは北魏とか北齊などと、かなりこまかく時代を区分するけれども、大づかみするためには南北朝様式と唐様式との二つを立てるのみである。その意味から言って、日本のように飛鳥・白鳳・天平の三本立てにするのは、様式の区別から見れば適當でなく、関野貞博士のように飛鳥時代と寧楽時代の二つに限る方がずっとよいと思う。そこで白鳳をどちらにつけるかが問題になる。

唐の高祖の武徳元年(六一八)から、わが大化元年(六四

五)まで二十七年である。天平時代に書道でさえ中国から日本に伝わるには二、三十年かかったというから、まして大化元年ころに建築技術が伝わるには、半世紀以上を要したに相違なからう。この計算で行けば大化元年に唐の初期の建築文化が入ることが、先ず考えられない話である。そうして見ると、さきほど問題にした飛鳥と白鳳との境を大化改新においたことは、すでに甚だ不合理だということになる。

私は法隆寺を様式上から見ても再建と考えてよいと主張したが、それを問題外としても、先ず法起寺塔婆が白鳳建築であり、しかも慶雲三年(七〇六)に相輪を上げたということ、先ず一応採用してよからう。故に白鳳未まで法隆寺系統の様式が存在していることになる。葉師寺塔婆の様式は、或いは白鳳時代の面影を伝えているにせよ、建築年代は何と言っても天平時代に相違ない。そうして見ると遺例に関する限り、白鳳時代は法隆寺系統の様式で占領されている。だから従来の飛鳥Ⅱ推古と白鳳との二本立てにする必要が、どこにも存在しなくなったのだから、むしろ飛鳥という名で一括すべきではないか。即ち

中国の南北朝様式 → 飛鳥時代の様式(従来の推古白鳳一括)

同 唐 様 式 → 奈良時代の様式(従来の天平)

というように、時代区分の時期を約六十年ほどくり下げて、和銅元年あたりにおけば先ず一応よいのではないかと思う。但し天武朝(六七三から六八六)あたりからは、唐文化も入って過渡期の現象が起り、南北朝系統の様式と唐系統の様式との併立があったとしても、少しも不思議とすべきでない。

これは、かつての村田博士の、奈良朝以前の上代建築史観を示すものであるが、とくに、博士の劃期的論文「支那建築史より見たる法隆寺系建築様式の年代」(昭和二一、四、二)によって(註二)、具体的な裏付をえていたところに、博士の発言の重みがあったのであるが、これに対する私の疑義はしばらく措くとしても、この白鳳様式を様式史的系列から抹殺しようとする博士の意企も、十年後の今日、ようやく変更をきたさざるをえなくなっているようである。即ち、新著において、

博士は、次のように述べていられる(註三)。

「一般にはこれを(法隆寺様式を指す 筆者)飛鳥様式といっているけれども、飛鳥様式というものは飛鳥時代の作品に限るはずだから、いまの一般の建築史のように皇極天皇までを飛鳥時代とする時代分けによれば、現在の法隆寺は飛鳥時代の建築でなく、したがって飛鳥様式ではありえない。現在の法隆寺は芸術史風にいえば、白鳳時代からの再建であるから、法隆寺様式は広義の白鳳様式に属するわけである。(建築史では白鳳時代を奈良時代前期というが、不適当な名称だから私は使わない。)(傍点筆者)

ここにおいて、はっきり、博士の旧説は、白鳳様式存在を認めるべく、更新されたわけであるが、では、博士は、白鳳様式をどのように観るのであるうか。

「私は白鳳時代の様式を次のように考える。それは単一な

るものでなく二つの系統に大別でき、(一)前代すなわち飛鳥様式の流れと(二)新たに大陸から伝えられた唐様式との傾向とがあったが、後者は志賀京とか藤原京のような新文化の中心地で採用されはじめた程度にとどまり、ひろく一般に用いられたのは前者であつたらしく、とくに斑鳩のような古い歴史をもつところでは、前代の系統をひく工匠が大きく根をはっていただろう。もちろん新様式は不思議に新鮮な魅力をもっているから、だんだん旧様式を圧倒するのであるがまずその前の段階として旧様式の一部に新様式がいくこんで行くから、旧様式が多少ずつ変化する。新様式とても最初には旧工匠が施行するのだから、旧様式が混入していたのが次第に純粹なものになつて行つたのである。したがつて白鳳様式と呼ぶものにも、時と所とによつて種々な傾向があつたはずであり、そのうちで法隆寺様式は飛鳥様式系(旧派)の色彩がかなり濃いものであつたかと察する。その点を明らかにしようとしても、残念ながら飛鳥時代の遺構が一つもないばかりか、白鳳時代の遺構さえ法隆寺様式のもの以外は全然ないのだから、われわれは間接的な証明方法をとつて、朝鮮半島や中国の古建築様式と比較考察する以外には道がないわけである。」

私は、博士のこうした考え方に、概ね賛成である。それゆえ、白鳳時代の建築様式を、このように、一種の過渡期的様式として見ることに、かならずしも反対ではない。過渡期的様式としてであれ、博士が、白鳳様式の存在を認められてい

る点、また、法隆寺様式を「飛鳥様式系(旧派)の色彩がかなり濃いものであつた」と見做すにせよ、法隆寺様式を白鳳様式に属するものとして、自説を更新なされている点に、私は、あらためて、博士の柔軟な学的態度に、敬意を表したい気持である。

しかし、私は、ここで博士によつて、一種の過渡期的様式として想定されている白鳳様式、とくに、この白鳳様式としての法隆寺様式が、単なる新旧様式の折衷としてのみ提出されているのに止まるのではないか、そうした疑義がわいてくることを、ひそかに恐れているのである。

なぜならば、いかなる過渡期的様式といえども、いや過渡期なるがゆえにこそ、かえつてその時代に個有の表現変容の方式、或いは、その時代に個有の外來様式受容の方式が、即ち、時代に個有の様式的特徴が、かならずや現れてくるものと、私には思われるからである。それゆえ、博士のいわれる白鳳様式、就中、白鳳様式としての法隆寺様式が、飛鳥様式に對して、独立した時代様式としての存在を主張しうるためには、はたして、この様式が、この時代に個有の様式的特徴を示しているのであろうか、即ち、先行する前時代の飛鳥(推古)様式との間に、如何なる様式対立が示されえているであろうかが、あらためて問われてくることになるのである。しかし、少くとも、これまでの博士の御説からは、この点は、いまだに伺いえていないのである。

さて、新著において、博士は、法隆寺系建築の細部に見ら

れる様式的特徴として、とくに、(一)大斗と柱との中間にある皿板(皿斗)、(二)雲形の斗拱、(三)高欄を支えている人字束、(四)軒の角垂木、(五)金堂内の天蓋、とを挙げて、主として、それぞれ細部の様式的特徴の源流を、中国建築史の上に問うその系統をただしていられるのであるが、それは、前時代の飛鳥様式に対して、法隆寺様式における白鳳個有の様式的特徴を、積極的に明らかにするというよりは、むしろどちらかといえば、これまでのように、法隆寺建築に見られる諸細部の上に、いかにして、上代の中国・朝鮮建築史から、演繹的に想定された飛鳥様式のおもかげを見出すか、という点に、なおもその様式解明の重点がおかれているように思われるのである。

就中、こうした傾向が、顯著に思われるのは、さきに挙げた細部のうち、皿板(皿斗)、雲形斗拱、及び天蓋についてであり、とくに雲形斗拱において著しいのである。博士の解明を、それぞれの細部について、すべて引用することは煩瑣にわたるので、ここでは省略するが、三つの細部共通の結論となっているものは、その、それぞれの細部が示している様式的特徴が、とりも直さず、その儘、飛鳥様式にも存在したてであろうという結論の仕方である。そして、そうした結論が成り立つために、この三者に共通する必須の要件は、それを実証するに足る飛鳥時代の遺物が、全く現存しないということである。

これに対して、残された二つの細部、即ち、人字束と、一

軒の角極とは、博士の云われる「白鳳的な新しい様式」を示す例証として挙げられているが、この二つの細部が、さきに挙げた三つの細部とはつきり異なる点は、この両者には、それぞれの先行様式と認められる対象を、実証的に、飛鳥時代の遺物の上に、或いはその類推を許す資料を、関聯する朝鮮の中国建築史の上に、見出すことが出来るという点である。

それゆえ、証拠不明のままに「飛鳥様式の名残り」に擬せられている、皿板、雲斗拱、天蓋については、しばらく割愛することとして、ここでは、実証可能なために「白鳳的な新しい様式」を示しているものとされる、人字束、及び、角極について、如何なる様式対立が、こうした飛鳥、白鳳両様式の間にあるのか、博士の目せられるその様式対立の問題に、とくに着目しておきたいと思う。

まず、高欄を支えている人字束の形についてである。博士の御説に即していえば(註四)、この「人字束は左右に凹曲線をのばしているが、その原始形は斜め左右に直線をだしたもので、それを一般に扱首とか合掌という」わけであり、そうした直線の扱首は、もともと構造的な意味をもっており、その源流は、すでに後漢の石造建築にみとめられているのであるが、ところがその後、「北斉ころにはじめて天龍山石窟とか響堂山石窟になると、直線的な扱首が凹曲線の人字束に変ってくる」のである。もともと博士は、この様式変容の時期を「こうした変化はまず木造建築にあらわれて、それが石窟彫刻に反映したのだから、北斉の石窟にみえるから北斉

時代に始まると速断しないで、もう少しさかのぼって第六世紀の半ば前後から変化してきたと考えたい。」と述べていられる。ともあれ、こうした直線から曲線へ変容した扱首、即ち人字束は、隋をへて唐にもおよぶのであるが、しかし、ここで注意すべきことは「朝鮮の高勾麗や百済などの三国時代の遺物では、ついに曲線的な人字束をみない」という事実である。かくして、博士は「そうすると人字束の形は朝鮮半島をへないで、中国から直接伝わった可能性が大きいと思う。」として、次のように結論していられる。

「そんな風に考えてくると曲線的な人字束は白鳳時代に始まったと思われると同時に、飛鳥様式では古代朝鮮と同じように直線的な扱首（合掌）であったと推定してよからう。」

私は、この結論を尊重したいと思う。なぜならば、私は、かねがね、仏教初伝当時の伽藍建築様式を、朝鮮三国の直様式と目してきているからであり、また、なによりも、ここで見られる推論の仕方が、即ち、扱首自身の形式変容に則して、時代様式の変容を跡づける見方が、きわめて様式的だと思われるからである。

さらに博士は、この人字束の曲線に關聯して、

「金堂の妻にも扱首（合掌）形があり、それにもまた直線ではなくわずかな凹曲線がみえる。ここに凹曲線を用いる例はきわめて少なく、わずかに玉虫厨子に同形があるにすぎないから、年代を決定する史料を欠くが、これまた白鳳時代の一傾向だったかと思う。新薬師寺本堂をはじめ多くの神社建築

に見える直線型こそ古式であり、飛鳥時代以来の型である。」

と述べていられるが、この点については、いささか疑問が残るのである。

なぜならば、金堂と玉虫厨子との、それぞれの妻に見られる凹曲線の扱首は、ともに屋根の勾配に支配されたものであり（とくに、玉虫厨子にあっては、それが工芸品であるために、妻の扱首上縁は、びったりと屋根裏に密着しえているので、なおさらである）、斗束のかわりとして、或いは高欄の支えとして使われる扱首とは、自ら、その形式発展の趣きを異にするものと云わざるをえないであろう。飛鳥時代における妻の扱首の形が、はたして直線か曲線かは、恐らく、仏教初伝当時の寺院建築の屋根が、いかなる勾配をなしていたかに、大いに關係があるものと思われる。それゆえ、妻の扱首の形について「多くの神社建築に見える直線型こそ古式であり、飛鳥時代以来の型であろう」と見做してしまうのは、少くとも、それが寺院建築に關するかぎりは、独断にすぎるのである。

次に、極に關してであるが、法隆寺系建築における極が、一軒平行配列の角極であり、これに對して、飛鳥時代の極が一軒扇状配列の丸極であったことは、すでに、実証的事実であり、兩者間における様式對立の存在は、きわめて明瞭である。それゆえ、ここでは、いままら法隆寺の極の上に、飛鳥様式の名残りを見るといふわけにはゆかないわけであろう。

が、なおも博士は、その法隆寺の極の上に、飛鳥様式を次のように見ていられる。

「そのほか極木が直線であるのは飛鳥様式と同じであろうが、法隆寺様式ではすべて角垂木である点が、たぶん白鳳風だろう。」

博士は、ここで、法隆寺系建築の極が、さきに博士が飛鳥様式と目した直線の扱首と同様に、直材であるということでも即ち、反りが無いということ、この極を、飛鳥様式と同じであろうかと述べているのであるが、極が架構材である以上類比的には、直材であるのが当然であり、極の直線、曲線を扱首の形式変容との関係で、その時代様式性を考えるのは、さきの、妻の扱首の場合と同様に、いやそれ以上に、独断にすぎるといわざるをえないのである。恐らく、博士の脳裏には、玉虫厨子の、反りのある極が対照されていたことと思う。しかし、すでに述べておいたように、玉虫厨子は、工芸品なるがゆえに、その極も、妻の扱首も、直接に、屋根裏に密着した状態で、屋根の凹曲線の勾配を、そのまま、極の反りとし、妻の扱首の反りとなしえたのである。その点、重ねて指摘しておきたいと思う。

なお、飛鳥時代の遺物において、飛鳥様式の極が、明らかに丸極にはかならないことが、すでに歴然としているにも拘らず、法隆寺の角極を、なおも飛鳥様式であると強弁するために、先学のなかには、太古以来の神殿建築の極が、角極であるということをも楯にとつて、角極の古様性を主張してき

た(註五)。

こうした角極の古代神殿建築発生説に対して、私は、既発表の拙論において(註六)、すでに否定的見解を述べておいた。要するに、太古以来、よく古制をとどめてきたものと考えられている、伊勢皇太神宮にしても、今日見るような、神殿建築としての様式的定形化がなされるのは、内外両宮の造替制度が定まったとみられる天武、持統朝年間であったことを指摘し、神殿建築における角極の使用も、この時期を俟たなければならなかった、というのが、私の意見の大要である。村田博士も、この点に関しては、私の見解に加担しているように見える。即ち、法隆寺の角極について、

「伊勢神宮の諸建築が角垂木であることが、多くの学者を迷わせたのであるが、考えてみると伊勢神宮の型は天武天皇が制定して以後のものであって、白鳳風が当然なのである。」と述べ、角極を、白鳳様式と認めざるをえない旨、明らかにしていられる。

しかし、この角極に対して、玉虫厨子の丸極について、「先年大阪の四天王寺講堂跡の北で発見された白鳳ころの円垂木の痕跡や、玉虫厨子の円垂木などの例は、中国の後漢や北魏のそれと一致するもので、おそらく飛鳥様式の名残り」とみてよからう」

と述べていられるのは、如何なるものであろうか。

なおここで、四天王寺講堂跡から発見された円垂木の痕跡というのは、去る昭和三一、二年の四天王寺遺跡発掘調査の

際、全く偶然に、旧講堂の北側基壇址そばのやや西偏りのところで発掘された、創建当初の建物のもと思われる軒隅の部材の痕跡を指しているわけであるが、注目すべきことには発見されたこの軒隅部材の痕跡に榿が丸榿であり、しかも放射状に配された扇榿であることが認められたのである。一軒扇状配列の丸榿という榿の形式は、漢魏以来の中国建築の古い伝統であり、この偶然の発見によって、仏教初伝当時の飛鳥時代の建築様式が、朝鮮三国時代の直横様式であることがいよいよ歴然と確められたのであるが、博士は、如何なる根拠がおりになつて、この四天王寺址発見の榿の痕跡を、白鳳ころの円垂木の痕跡と目されるのであろうか。四天王寺の創建年代については、確かに疑義少なしとしないであろう(註七)。しかし、それは、主として崇峻紀にみえている寺家縁起的創建事情にかかわるものであり、それをもって、四天王寺の推古創建を疑う、積極的な根拠となすことは出来ない筈である。むしろ、このたびの四天王寺址の発見によって、四天王寺の推古創建は、より確実な実証的根拠をえたものと考へるべきであらう。

なお、万一にも、四天王寺の創建が、実際に、孝徳朝前後にまで下ることがあつたとしても、それは、飛鳥様式の下限年代の延長を示すことにはなりえても、これをもって、四天王寺の榿形式を白鳳様式に属するものと見做し、その丸榿をして、飛鳥様式の名残りと呼ぶことにほならないであらう。玉虫厨子の丸榿についても、まさに、同断である。

さて、以上をもって、このたびの新著における、村田博士の法隆寺白鳳様式説に対する、遂次の検討を終えるわけであるが、なお最後に、博士の飛鳥白鳳様式史観に対して、いささか批判的私見をまともておきたいと思う。

まず第一に、法隆寺様式を、白鳳様式に属するものとして、あえて、博士御自身の旧来の御説を更新なされ、その様式分析にむかわれた良心的態度に対して、私は、ふかく敬意を表するものであるが、博士の、法隆寺様式の細部に対する分析が、諸細部の、白鳳様式としての様式史的意味を明らかにするというよりは、むしろ依然として、飛鳥様式の系統をそこに尋ねようとする意図によって多くがなされている、そのいささかの未練がましさを、私は惜しまずにはいられないのである。

そのために、法隆寺様式を白鳳様式と見做す、博士の折角の御主張も、ともすれば、このたび博士の提起なされた、法隆寺金堂の天武朝初年再建説を背景とする白鳳様式説として、ひらたく云えば、白鳳に建つた以上、様式も白鳳という素朴な様式史観に、支えられ勝ちになつてゐる箇所も、決して少くないようである。

即ち、法隆寺様式の細部形式自体に対する、白鳳様式としての様式史的意味の追求が、足りないように思われるのである。という意味は、たとえば、なぜ、法隆寺の榿は、飛鳥様式における、一軒の扇状配列の丸榿から、やはり一軒ではあるが、平行配列の角榿へと、その様式変容を、あえてなさざ

るをえなかつたか。扇状（放射状）から平行へと変化する、
椀の配列形式の上に見る様式の変容、円形から方形へと変化
する、椀の断面形式の上に見る様式の変容、こうした形式自
体の時代的変容の意味を問うことなしには、角椀を、きわめ
て顕著な様式的特徴とする法隆寺の様式を、飛鳥時代の様式
に対して、白鳳時代の様式の上に定着させることは出来ない
筈である。

しかも、法隆寺系建築に見る椀の配列は、構造上の無理を
犯してまで、あえて、扇状配列から平行配列へと変化してい
るのである。こうした、様式変容の裏背に、明白に時代を劃
する、白鳳時代個有の表現意志を、私は見るのである。様式
史の任務とするところは、ただ単に旧様式の残存を新様式の
なかに見ることではなく、積極的に、新様式の時代的意味を
問うことではないだろうか。とくに、日本上代建築史の場合
それは、朝鮮を含めて中国建築との、各時代個有の接触のあ
り方、即ち、外来様式変容の仕方や時期が、まず問われてく
ることになると思う。

たとえば上代朝鮮における角椀の出現は、初唐の新様式に
はじめて接触しえた新羅統一時代前後に俟たなければならな
かったのであるが、そうした上代朝鮮における様式史的事実
は、同時に、日本における角椀使用の上限年代、ひいては、
朝鮮三国直模様式に代わる新様式抬頭の時期を、十分に示唆
することになるのではないだろうか（註八）。法隆寺様式の年
代も、その様式史的意味も、自らそこに、解明の緒口を見い

出すことになるであろう。ここにおいて、法隆寺様式に対す
る様式史的位置づけも、はじめて、旧来の飛鳥様式觀の羈絆
を脱することになるものと思われるのである。

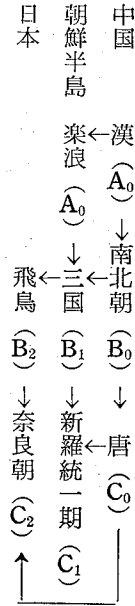
第二に、これまでの私見と密接に関連することであるが、
村田博士の、法隆寺建築白鳳様式説に、なお満ち足りないも
のをおぼえるのは、博士には、白鳳様式としての法隆寺建築
に対して、様式史的に一時代を劃すべき、いな、実際に劃し
えていた、飛鳥時代の建築に対するイメエジが稀薄のように
思われる。ということとは、具体的にいえば、推古創建の飛鳥
寺や四天王寺などの仏教初伝当時の諸建築と、法隆寺系諸建
築との間に、あえて時代様式的対立の存在を認めなさろうと
していられない点を、いうのである。

博士は、法隆寺様式の分析において、細部いたるところに
飛鳥様式の系統、飛鳥様式の名残りを指摘してられるが、
これを逆にいえば、実際の飛鳥様式を、法隆寺様式とあまり
相違のないものとして、即ち、実際の飛鳥時代の建築と、法
隆寺系建築との間には、ほとんど様式対立が認められないも
のとして、飛鳥様式を想定なされていられるようである。少
くとも、様式史的には、同じ系統の上で考えていられること
は確かである。

即ち、博士は、すでに見てきたように、私は白鳳時代の様
式を次のように考えるところとして、これを二つの系統に大別し、
第一を、前代すなわち飛鳥様式の流れと、その第二を、新た
に大陸から伝えられた唐様式の傾向としていられる。勿論、

法隆寺様式を前者に目してのことである。では、この飛鳥様式は、大陸の如何なる時代の傾向と見てのことであろうか。旧著に徴するかぎり、それは、中国の南北朝時代となるわけである。しかし、幸いなことに、いま手許にある、最近日、村田博士から戴いた玉簡中（昭和三五年八月十五日付）に、きわめて参考になる図式が示されているので、あえて引用を許して戴くことにする。

「私の目下の考え方は、おおづかみにして、



となり、 B_0 、 B_1 、 B_2 は同じBでも少し異なることを想定します。そしてAとB、BとCとの中間に過渡期を入れるのです。法隆寺系の諸建築は玉虫厨子とともに B_2 だというのが、私の説です。」

右の図式では、白鳳はとくに記載されていないが、法隆寺系の諸建築は玉虫厨子とともに B_2 と註記されているので、飛鳥(B_2)の下にでも白鳳(B_2)を位置しておいてよいと思うのであるが、何れにしても、法隆寺様式が、飛鳥様式の系統として、朝鮮三国を媒介とする南北朝様式の流れをくむものとのみ見做され、唐様式の傾向を下にある奈良様式に対置している点、旧著における様式史観との間に本質的な差は認

められないのである。こうした様式史観に立たれるかぎり、飛鳥様式と法隆寺様式との間に、到底、一時代を劃しうる様式対立を認めえないのも当然である。

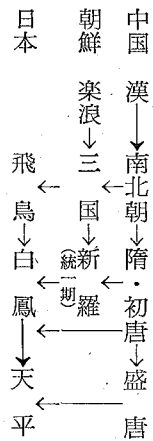
しかし、はたして、推古創建の飛鳥寺、四天王寺をはじめとする飛鳥諸建築と、法隆寺系建築との間に、いかなる様式対立もありえないのであろうか。推古草創の飛鳥寺や四天王寺の様式と全く同様に、法隆寺の様式もまた、まぎれもなく朝鮮三国の直模様式、乃至はその近似様式と見做しうるのであろうか。私は、疑問なしとしないのである。

私は、かつて、問題を具体的、かつ実証的に検討するため、朝鮮三国の直模様式と見做しうる飛鳥寺、四天王寺を中心とする推古創建伽藍を、法隆寺系建築に対して、四天王寺系建築と名称し、とくに、推古時代（朝鮮三国時代をも含めて）の遺物遺址の上で実証の可能な、この四天王寺系の様式の特徴として、飛鳥寺及び四天王寺式伽藍配置、鍔葺形式の屋根（その際、屋根の葺き方は行基葺、軒丸瓦は素弁蓮花文、軒平瓦には未だ忍冬唐草文の盛行を見す）、一軒扇状配列の丸種とをあげ、これを、法隆寺系の、法隆寺式伽藍配置、入母屋造の屋根、一軒平行配列の角種に對置せしめ、その様式対立の意味するものの様式史的解明につとめてきたのであるが（註九）、博士は如何様にお考えであらうか。

さきに、日本における角種使用の上限年代についていささか触れた際に、上代朝鮮における角種の出現は、隋・初唐の新様式にはじめて接触しえた新羅統一時代前後に俟たなければ

ばならない旨、述べておいたのであるが、その隋・初唐に対しては、我が国からも、すでに推古朝の半ばより、或いは新羅を廻路として、或いは直接に、遣使や留学生が、かなりの数送られていたことは周知のところである。私は、法隆寺の角槿が、いみじくも象徴するように、直接間接を問わず、隋・初唐の新様式との接触期をもって、白鳳様式の開花期と考えたのである。なお、これまで何度も述べてきたように私は、飛鳥時代の建築様式を、朝鮮三国時代の直模様式と定義しておいたのであるが、この隋・初唐の新様式との接触期は、同時に、この飛鳥様式の和様化が積極的に進められてゆく時代でもある。三国直模様式である四天王寺系建築に対して、法隆寺系は、隋・初唐様式と旧様式の和様化とが、渾然と一体化したものと云いうるであろう。

なお、ここで一言断っておきたいのは、様式史的な見方からすれば、恐らく、隋と初唐間には、様式の差はなかったものと考えられるので、隋・初唐様式と一括しておくのであるが、この隋・初唐様式は、思うに南北朝諸様式の宏大なターミナルをもなしていたものと想像される。それに対して、朝鮮の三国様式は、南北朝様式の影響によるとはいえ、そこには楽浪文化以来の漢魏の伝統がきわめて色濃く温存されていたものと考えられる。朝鮮半島は、地理的、文化的に一種の虫様突起の役割をはたしていたからである。私の考えを、村田博士に倣って、簡単に図表すると、左のとおりになるのであるが、前掲の村田説との相違は明らかな筈である。



第三の批判的私見として、おわりに指摘しておきたいことは、法隆寺様式の分析に際して、博士は、玉虫厨子を、すでに白鳳様式と見做して論を進めていられる点である。

即ち、玉虫厨子に見られる、屋根の妻の凹曲線の扱首をもって、白鳳時代の一傾向と見做している点、或いは、玉虫厨子を白鳳に擬し、その丸槿を飛鳥様式の名残りを示すものと見做している点、看過されえないのである。

しかしこの問題は、博士の、玉虫厨子白鳳末期制作説と密接な関聯があるので、その際、触れることにして、いまは略しておく。

(註一) 村田治郎「法隆寺建築の様式」(総観法隆寺)所収 昭

和二四、一〇、一一九九頁

(註二) 村田治郎「支那建築史より見たる法隆寺系建築様式の年代」(宝雲)第三六冊所収 昭和二一、四、一)

(註三) 村田治郎「法隆寺の建築」(法隆寺)毎日新聞刊 所収

昭和三五、七、二〇) 五二頁

(註四) 前出 五四頁

(註五) かつて、法隆寺再建非再建論争中、源豊宗氏が、再建説の一つの根拠として、この角槿をあげ、飛鳥の丸槿に対して、角槿は白鳳式であるとしたのに対して、足立康博士は

古い神社形式に於いては角種が使われていることを指摘しこれに駁している。(足立康「法隆寺再建非再建論争史」昭和一六、一〇、一一)三四九頁参照

(註六) 拙稿「玉虫厨子制作年代考(三)―建築の意匠より見た玉虫厨子の様式年代について―」『成城文芸』二〇号 昭和三四、一一、三〇)八八頁

(註七) 村田治郎「四天王寺創立の研究史」(一)(二)(三)『史迹と美術』二一六、二二七、二二八号 昭和二六、一〇～一一)参照

(註八) 前出 拙稿 七九頁参照

(註九) 前出 拙稿 及び拙稿「玉虫厨子における鏡葺形式の様式的意味について―村田治郎博士の疑義に答える―」

『成城文芸』二二号昭和三五、七、一五)

三、玉虫厨子の白鳳末期制作説について

玉虫厨子に関して、村田博士は、新著のなかで、次のように述べていられるのであるが(註二)、玉虫厨子の制作地を、檜という材料の上からも、日本製と目されている点、また制作年代を、はっきり、白鳳末期に擬していられる点、博士の旧来の御説を更新するものとして、注目してよいと思う。即ち、

「玉虫厨子は百済で造られたという説が大正の終りちかくまで一般的であった。その考え方には他に全く類例のない作時代は推古だという前提があったと思う。現在ではむしろ

日本製とみる見かたが強くなった。よく似たものが方々の寺院にあったとすれば、日本製とみるのが一番自然だし、材料の大部分も法隆寺をはじめ古代日本の木造建築でいつも使った檜材だからである。制作年代は法隆寺金堂の細部にくらべて、古式の円垂木だが直線ではなく反りがついており、雲形斗拱にもまた反りがついて軽快さが加わったほか、金堂の雲形斗拱または雲形斗のような彫りこみがない点などから考えると、様式的には金堂よりものちに造られたとしかいえない。もつとも、垂木や雲形斗拱の反りという点は工芸的なものと実際の建築との相違もあろうから、それらを考慮に加えても、玉虫厨子宮殿にみなざる洗練された作風は、法起寺三重塔あたりと比較すべきものかと思う。つまり第七世紀の後半のうちでも末期ころらしく、あるいは第八世紀初葉までくだることもあろう。」

さて、まず玉虫厨子の制作地に関してであるが、村田博士は、つとに、先学の玉虫厨子舶載説(註二)に対して疑義をいだかれ、主として玉虫厨子の建築様式の上から、玉虫厨子が日本製と見做されるべき所以を提唱されてきたのである(註三)、材料の上から、これを本邦作とする見方には、否定的意見をいだかれていたのである。

玉虫厨子の用材が、朝鮮には産しない檜材であることをもって、玉虫厨子を本邦作と見做す説は、今日の通説であるが村田博士は、檜材が朝鮮に産しないという理由だけで、玉虫厨子を本邦作とする説に対して、次のように反駁していられ

る(註三)。

「残る唯一のより所は材料が檜であつて、朝鮮には産しないという点のみになるが、しかしこの檜材とて、どれほど精密な調査が行われたかが疑問であつて、揚子江流域の檜ではないとは、まだ断定せられていないのを顧る必要がある。」

村田博士の反論を、単なる仮定的な疑義にすぎないとしてしまえば、それまでであるが、しかし、こうした疑義も存する以上、材料の原産地であるという理由だけで、玉虫厨子の本邦作を断じるといふのでは、たしかに、立論の根拠に安定を欠くうらみも、なきにしもあらずといえよう。

私は、こうした、日本産の檜材による本邦説を、さらに補強する意味で、材料の原産地もさることながら、玉虫厨子の場合、その材料は、単に檜材のみではなく、樟材も併せて用いられている点を、具体的に指摘し、問題はむしろ、この二材の使用法が、飛鳥・白鳳期における上代木彫の慣用に合致し、かつその材料の選択が、太古以来の伝統的意志にもとづいてなされている点にある旨、あえて、私見を述べ(註四)、識者の注意の喚起をもとめたのである。

周知のように、飛鳥・白鳳期の上代木彫は、いまのところ広隆寺の宝冠彌勒像を除く以外は、すべて、その用材が、樟材であることが確かめられているわけであるが(註五)、玉虫厨子の場合、その主要な部分は、すべて、檜材で作られており、台座に彫刻された蓮弁の部分のみに、樟材が用いられているのである。これは、法隆寺金堂の釈迦三尊像、薬師三

尊像の台座と、その蓮弁の場合も同様であり、さらに金堂の天蓋も檜材であるが、そこに取付けられた天人の彫刻はやはり樟材なのである。百済観音像の場合も、像身と光背は樟材であるが、その台座のみは、やはり檜材である。

こうして見てくると、用途によって、はっきり、用材が弁別されていることがわかる。即ち、像身、光背、蓮弁のごとき彫刻の部分には、すべて樟材が用いられ、他方、宮殿、台座、天蓋などの建築的部分には、やはりすべて檜材が用いられ、そこには、用材選択の混乱は、全く見られないのである。

玉虫厨子において、その用材の弁別が、このように、全く飛鳥・白鳳期における上代木彫の慣用に合致している点を、私は重視したいと思う。玉虫厨子を、本邦作と見做す所以である。

なお、日本書紀神代之巻の記載するところによれば(註六)、素戔鳴尊は、我が国における主要有用材を、とくに四樹種をあげ、その用うべきを定めて、杉・樟は船材に、檜は瑞宮の材に、椴は棺材に用いよと述べているが、こうした伝説によつて見ても、上代木彫における、用材の使途弁別が、太古以来の伝統的意志と慣習にもとづくものであることは、容易に納得されうるところである。

このような、私の、用材弁別から見た玉虫厨子の本邦説に對して、村田博士からは、早速、御書簡(昭和三四、六、一〇日付)をもつて、私の説の前提ともいふべき、日本産の檜

材による本邦説には、なお疑義があるとして、依然として、「がんらいヒノキを昔は多量に生産した土地が今日では杉や松のみに変っている場合が日本に多いことから見て、現在ヒノキがないからという理由で、南朝鮮にヒノキがなかったという論理が成立するか否か疑わしいことでしょう。」と述べていられたのであるが、このたびの新著においては、旧説を更新なされて、材料史的立場から見た玉虫厨子本邦説をも、認めていられるのは幸いである。

さて、次に、玉虫厨子の制作年代に關してである。すでに見てきたように、博士は、玉虫厨子の制作年代を、「第七世紀の後半のうちでも末期のころらしく、あるいは第八世紀初葉までくだることもあるう」と述べ、その様式年代をはっきり白鳳末期に擬していられるわけであるが、それは、如何なる様式史的根拠にもとづいてなされたものであるか、遂次、検討してゆきたいと思う。

村田博士の見做されている、この玉虫厨子の年代を見て、すぐに気がつくことは、この年代が、概ね、七世紀と八世紀とに境する文武朝（六九七から七〇七まで）前後に擬せられていることである。そのことは、この玉虫厨子の制作年代が、慶雲三年（七〇六）と目せられている法起寺三重塔の建立年代との比定によつたものであることを示すものである。

法起寺三重塔の建立年代については、その塔婆露盤銘に見えている、慶雲三年という記録を認めるか、否かについて、なお異論がないわけではないが（註七）、少くとも、博士御自

身は、法起寺三重塔の完成年代を、慶雲三年（七〇六）と目していられるので（註八）、この塔婆露盤の銘文を認めていられるわけである。

いま、顕真の「聖德太子伝私記」に拠つて、この銘文を見おきたいと思う（註九）。

法起寺塔露盤銘文

上官太子聖德皇壬午年（傍朱）推古天皇三十二月二十二日。臨崩之時。於山代兄王一勅御願旨。此山本宮殿宇即処專為作レ寺。及大倭国田十二町。近江国田三十町。至千戊戌年（傍朱）舒明天皇十年福亮僧正。聖德御分敬造彌勒像一軀。構立金堂。至乙酉年（傍朱）白鳳十四惠施僧正。將竟御願。構立堂塔。而丙午年三月。露盤營作。

この露盤銘によると、山背大兄王が、聖德太子の薨後、遺命を奉じてこの寺の基を開かれたのであるが、その時は、宮殿をその儘、寺にただけであった。その後、実際に金堂が建立され、本尊の彌勒像が造立されるのは、戊戌年、即ち、舒明天皇一〇年（六三八）福亮僧正の手によるものであり、さらに、乙酉年、即ち天武天皇一三年（六八五）に至つて、惠施僧正によつて、その他の堂塔が建立、さらに、丙午年、即ち、文武天皇慶雲三年（七〇六）に、露盤を塔上にあげたというのである。

いま、三重塔の建立についてのみいえば、この銘文からは天武天皇一三年（六八五）に起工、文武天皇慶雲三年（七〇六）に完成ということになる。村田博士が、玉虫厨子の制作

年代に擬していられるのは、この完成年代についてである。その点に、まず注意をとめておきたいと思う。

このように、村田博士は、玉虫厨子の制作年代を、法起寺三重塔との比較において、その完工年代に擬せられている文武朝の慶雲三年（七〇六）に据えていられるわけであるが、はたして、博士の、この年代比定の仕方に、疑問はありえないであろうか。私は、疑いなしとしないのである。

まず第一に、ここで、玉虫厨子の制作年代に比定されている法起寺三重塔の年代は、この塔の起工年代ではなく、完工年代を意味しているという点についてである。

いうまでもなく、玉虫厨子の制作年代が、法起寺三重塔の建立年代に擬せられている所以は、玉虫厨子の作風が、法起寺三重塔のそれに、よく相い通うものがあるという、博士の御觀察にあるわけであるが、この場合、擬せられるべき建立年代が、その完工年代であっても、はたして差支えないものであるか。私は、疑問なしとしないのである。

玉虫厨子の制作年代が、このように、法起寺三重塔の完工年代に擬せられていることは、正確には、玉虫厨子の制作が、この法起寺三重塔がすっかり出来上ってしまったその前後に、ようやくなされた、ということの意味するにとどまり、かならずしも、両者の様式年代の同時性を示していることにならない筈である。なぜならば、法起寺三重塔の様式を規定するのは、いうまでもなく、起工時における建築プランであり、それゆえ、そこに反映する時代様式性は、当然

起工年代、乃至はそれ以前のものと考えられるからである。

一体に、これまでの建築様式史においては、或る建物の建立年代といっても、はたしてそれが、起工年代を指すものか或いは完工年代を指すものか、きわめて曖昧であったように思う。ということは、造営年代の具体的な所要年数を、すっかり失念していたということにもなるのである。上代における伽藍建築は、決して、たちまちのうちに出来上ったのではなく、その造営工事に、かなりの年月をかけているということとは、日本書紀崇峻、推古兩紀に見られる飛鳥寺の建立の経過、或いは、上宮聖徳法王帝説裏書に示された山田寺建立の記録、ここに示された法起寺三重塔の露盤銘などによっても、すでに十分に推察されるところである。即ち、日本書紀においては（註一〇）、

崇峻紀元年（五八八）秋七月の条に

蘇我大臣亦依本願、於飛鳥地起法興寺。

同じく五年（五九二）冬十月の条に

是月、起大法興寺仏堂與歩廊。

推古紀元年（五九三）春正月の条に

壬寅朔丙辰、以仏舍利、置法興寺刹柱礎中。丁巳建

刹柱。

同じく四年（五九六）冬十一月の条に

法興寺造竟。則以大臣男善徳臣二拜三寺司。是日、恵慈恵

聰二僧、始住於法興寺。

と記されているのであり、飛鳥寺の発願より落慶までに、約

一〇年に近い年月を闊している。しかしこれは、きわめて短期間になされた例であるが、次に示す山田寺の場合は、これに比べて、かなり期間を要している。即ち、上宮聖徳法王帝説の裏書によって（註一一）、必要な個所を引用しておく、次のとおりである。

有本云。誓願造_レ寺。恭_ニ敬三宝。十三年辛丑春三月十五日、始_ニ浄土寺_一云云。

注云。辛丑年。始平_レ地。癸卯年。立_ニ金堂_一云云。戊申。始

僧住。己酉年三月廿五日。大臣遇_レ害。癸亥。構_レ塔。癸酉年十二月十六日。建_ニ塔心柱_一。（中略）丙子四月八日。上

露盤。戊寅年十二月四日。鑄_ニ丈六仏像_一。乙酉年三月廿五

日（傍疑）。点_ニ仏眼_一。山田寺是也。註。承暦二年戊午南一房写_レ之。真臘之本云云。

この記録で見ると、舒明天皇一三年（六四一）に寺地整備に着手、皇極天皇二年（六四三）に金堂起工、それから五年目の大化四年（六四八）に金堂完成、天智天皇二年（六六三）に起塔、天武天皇元年（六七三）に塔の心柱を建て、次いで天武天皇四年（六七六）によりやく露盤を上げ、塔の完成を見ることとなる。その発願より堂塔相並ぶまでに、実に三五年を数えるのであり、その進捗状態はさきに見た飛鳥寺の場合との間にかんがりの懸隔が見られるわけであるが、山田寺の場合、その間、願主蘇我倉山田石川麻呂の讒死事件もあり、造寺の停頓は、当然考えられるところであるが、しかし、一般的に云って、造営工事が、直接の官営でない場合には、概ね、この程度の年数は普通であったものと見て差支えないで

あろう。再建の法隆寺、或は法起寺の場合も、恐らくその例外ではなかったように思われる。

なお、この山田寺建立の記録において、同様に注目しておきたいことは、金堂及び塔のそれぞれの造営年数である。即ち、金堂は完成までに、寺地が決ってから七年、起工より五年を要し、塔の場合は、起塔よりその完成までに、一三年を要している点である。この、金堂及び塔それぞれの造営年数は、この時代の非官営の堂塔造営工事の進捗ぶりの大略を示しているものと思われる。金堂に比べると、塔の造営年数はかなり長いようであるが、さきの法起寺三重塔露盤銘に見た、塔の造営年数も、優に二十年をこえているのである。

それゆえ、このように、かなり長期に亘って造営されている伽藍、乃至はその個々の堂塔の建立年代を論じる場合にはその起工年代と完工年代は、はっきり区別されて然るべきであり、その建築様式は、当然、伽藍建立の発願当初の、少くとも、それぞれの堂塔の起工されたときの最初のプランに、その大略を、依拠しているものと考えて然るべきであろう。そうなると、或る建築物に問われるべき様式年代は、特別な事情が介在しないかぎり、そこに比定される実年代は、当然その建築の起工年代、乃至はそれ以前に充てられることにならるのである。

このように考えてくると、もし、玉虫厨子と法起寺三重塔とが、同じ建築様式に属し、しかもその作風がきわめて相い似ているという理由で、玉虫厨子の制作年代を、法起寺三重

塔の建立年代に比定するというのであれば、玉虫厨子が、法起寺三重塔の追躰作であると見做されえないかぎり、それは塔の完成年代としての文武朝慶雲三年（七〇六）に擬せられるべきではなく、その起工年代である天武天皇一三年（六八五）に擬せられて然るべきである。なぜならば、法起寺三重塔の様式は、当然、その建築プランの出来上った起工年代、乃至はそれ以前のもので見做されうるからである。その間、優に二〇年をこえるのであるが、白鳳盛期から、まさに奈良時代に転換しようとする、この七世紀と八世紀との境にある二〇年は、様式的にも決して、小さくはない筈である。あって、村田博士に、疑義を呈する所以である。

さて、第二の疑問は、如何なる根拠にもとづいて、村田博士は、玉虫厨子と法起寺三重塔との間の、様式の同時代性を述べていられるか、についてである。博士のお考えを、要約してみると、次のとおりになる。

(一) 玉虫厨子の極は、金堂の角極に比べると、古式の円垂木だが、直線ではなくて反りがついており、雲形斗拱にもまた反りがついて軽快さが加わっている。

(二) また、玉虫厨子の雲形斗拱には、金堂の雲形斗拱または雲形斗のような彫りこみがない。

(三) 玉虫厨子の宮殿にみない洗練された作風は、法起寺三重塔あたりと比較される。

即ち、ここで、博士は、まず玉虫厨子を法隆寺様式に属するものと見做した上で、その前提の下に、玉虫厨子の細部を、

法隆寺金堂のそれと比較し、極や雲形斗拱にみられる形式的特徴は、むしろ、法起寺三重塔に相い通うものがあるとして一連の法隆寺系諸建築の様式年代的系列のなかで、玉虫厨子の相互的位置を、法起寺三重塔のそれに比定していられるわけである。

では、博士は、法隆寺系諸建築の様式年代的系列を、どのように考えていられるのであろうか。玉虫厨子と法起寺三重塔を比較するまえに、この点を明らかにしておきたい。博士が、法隆寺金堂の完工年代を、天武天皇初年に擬していられることは、すでに見てきたとおりであるが、法隆寺五重塔に対しては如何なる位置づけがなされているのであろうかが、次に当然問われてくることになるであろう。この点について、博士は、新著において、左のとおり述べていられる（註一二）。

「一時中絶していたのが（筆者註—金堂の完工後に）再び工事ははじめたのは、持統天皇の五年（六九一）ころかららしく持統七年十月二十六日天皇から種々なものが施入されているのは、再建工事の進展と無関係でなからう。それは天武初年から二十年たらずのちのことであって、中門と五重塔との木工事が終わったところかと思う。しかし内部の完成にいたらないで、また中絶したのか、それからまた二十年ちかくのちの和銅四年（七一）五重塔第一層内部の塑像や中門の金剛力士像が造られている。したがって五重塔の完成はこの時期であったらう。金堂の壁面がまずできあがり、ついで五重塔の壁面におよんだのも、このころ前後かと推定したい。」

(中略)

法隆寺五重塔と法起寺三重塔とは様式が同じ系統であるが、後者のほうが洗練されていると見るのは建築史家の常識であり、そして後者は文武天皇の慶雲三年（七〇六）の完成であるから、法隆寺五重塔はそれ以前の建築であることが考えられる。それを私は持統七年（六九三）ころの時期においてはどうかと思うのである。もともどこでいう時期は大工工事に限るのであって、塑像や壁画などの完成をふくまない。」

村田博士は、ここで見るように、法隆寺の五重塔を、法起寺三重塔よりも年代が遡上るものとしていられるのであるがはたして如何なる様式的根拠にもとづくものであろうか。まず、ここで問題になるのは、法隆寺五重塔の建立年代についてであろう。

さて、村田博士は、ここで示されているように、持統天皇七年（六九三）をもって、中門及び五重塔の木工事終了の時期と目していられるわけであるが、その根拠とするところは博士の言葉をもってすれば、「この持統七年十月二十六日に天皇から種々なものが施入されている」からであるという。しかし、はたしてそれは、十分に法隆寺五重塔の完工年代を証するに足りうるものであろうか。

いま、法隆寺伽藍縁起并流記資財帳によって、納賜の状況を検証しておく、次のとおりである（註一三）。

(1) 経臺壹足

右、癸巳年十月廿六日、飛鳥宮御宇 天皇為仁王会納賜者

(2) 合蓋壹拾壹具

仏分肆具 一具紫

法分柒具

壹具 紫具

右、癸巳年十月廿六日仁王会、納賜飛鳥宮御宇 天皇

者

(3) 黄帳壹帳

広長 九尺六寸 二幅半

緑帳壹帳

広長 九尺八寸 二幅

広長 八尺三寸 二幅

右、癸巳年十月廿六日 仁王会、納賜飛鳥宮御宇 天皇

皇者

村田博士は、こうした持統朝の施入をもって、「再建工事の進展と無関係ではなからう」と見て、これを、五重塔完工の時期と結び付けていられるのであるが、これは、確かに一応の見方であり、そのために、これまで、法隆寺金堂を持統朝の再建と見做す説の有力な根拠ともなってきたのである（註一四）。すでに、法隆寺金堂の完工年代を、文武天皇初年と目されている村田博士は、この持統朝の施入を、その後の五重塔や中門の完工年代に擬せられているわけである。

しかし、法隆寺資財帳に見えている、こうした持統朝の施入をもって、直ちに、法隆寺金堂なり、五重塔なりの完工年

代に擬するのはいささか早計にすぎるといわざるをえない。なぜならば、この癸巳年の仁王会のための納賜は、明らかに、日本書紀の持統天皇七年十月二十三日の条の（註一五）己卯、始_レ講仁王經於百國、四日而畢。

の記載に照応するものであり、それゆえ、法隆寺への納賜もこの全国的な規模でなされた仁王会行事の一環としてなされたものと見るべきであり、法隆寺の金堂、或いは五重塔の落慶に寄せて、特別に納賜されたものとは解しえないのである。このことは、さらに、大安寺伽藍縁起并流記資財帳（註一六）に次のような、同様の記載を見るに及んで事情はいよいよ明らかになる筈である。

繡大灌頂一具

右、飛鳥宮御宇 天皇、以癸巳年十月廿六日、為仁王会納賜者

さらにまた、この翌年の甲午年、即ち持統天皇八年（六九四）には、法隆寺、大安寺それぞれに、金光明經一部八巻が納賜された旨、両資財帳に記されているのである。このように見てくると、持統天皇七年頃には、法隆寺の金堂も、他の諸大寺同様の法要が営まれるほどに、すっかり出来上っていたであろうことは、十分に推察しうるのであるが、同時にこうした持統朝の施入が、決して、何か特別な意味で、法隆寺になされていたものでもないことも、ここに歴然としてくる筈である。したがって、この持統天皇七年（六九三）の納賜をもって、法隆寺五重塔の完工年代に結びつける博士の御説

の根拠は、きわめて薄弱といわざるをえないのである。またこの完工年代から逆算的に推定された持統天皇五年（六九二）の起塔年代も、当然、その成立の根拠を欠くものといわざるをえないであろう。

また、ここで、さらに疑義に堪えないのは、博士は、法隆寺五重塔の、起塔から完成までの造営期間を、僅か二年としか、見ていられないのであるが、この年数は、すでに見てきた山田寺や法起寺などの場合と比べると、あまりにも短かすぎはしないであろうか。私は、法隆寺金堂と五重塔との建築細部の上に、かなりの相違を見るので、やはり五重塔は、金堂の落慶よりも、かなり遅れて起工されたものと考えたいのであるが、その五重塔自身も、かなり長年月の造営期間を経て、完工に至ったものと推測しているのである。博士は、博士の目される完工年代は、大工工事に限るのであって「塑像や壁画などの完成をふくまない。」と述べていられるが、いまかりに、塔上に露盤をあげる段階をもって、建築上の完成と見做しておくとしても、起工より完工まで僅か二年というのは、あまりにも短かすぎるのであるが、如何であろうか。

私自身としては、金堂の場合はいうまでもなく、塔の場合も、造塔本来の目的である、舍利供養の儀式が営まれる状態にまで出来上ったときを目して、この塔の完工年代と考えていたのである。それゆえ、たとい、大略の構造体が出来上っていたとしても、内部に、仏龕やそれと密接に関連する莊嚴が、なお未完成に放置されたままであれば、その時期をもつ

て、これを塔の完工年代と見做すことは出来ないであろう。

法隆寺五重塔の場合、現在、その初層に、心柱に密着して仏壇と須彌山が相関聯して造られており、また、内壁に、壁画が描かれていたことも、昭和修理の結果、明らかにされているのであるが（註一七）、こうした仏壇や須彌山、或いは壁画が、塔の造営工事の過程中、どのような前後関係をもって制作され、或いは改造されていったかを検討することが出来れば、多少なりとも、この塔の造営に要した期間が推察されるであろう。

この点に関して、浅野清博士は、昭和修理の報告のなかでまず、最初の初層塔内の模様を、次のように、述べていられる（註一八）。

「最初の計画は、今よりずっと低い木製の仏壇を造り、その外框を四天柱の外面に取付け、檼を中心に入れて、四天柱内に終るよう口の如き糸巻き形の平面に壁を配したもので、須彌山が四天柱を巻いて外へ発展する如きものではなかったらしいが、柱上方や斗拱部に見られる多数の埋木を見ると、或は上方で何者か柱外へ飛び出していたものであったかも知れない。又その時は仏壇も著しく縮小されるので、上下に鑑段式にでも納めない以上、現在の如き多数の塑像の配列は不可能であろう。そのようなことを考慮に入れる時、改造はこの塑像の計画発案と関連するものであったかも知れない。」
では、こうした初層塔内は、その後どのように改造されてゆくのであろうか。浅野博士は、初層塔内の壁を悉く解き終

って初層柱の面を全部明かすみに出し、かつ天井板もすべて外置した結果、壁や天井の造作が、かなり長期間にわたって放置されていたものと推定せざるをえなかったようであるがさらに、博士が、次のように述べていられるのは（註一九）、注目されてよい。

「このようにして、壁や天井の作られない先に、先ず仏壇や龕が出来始め、その間に相当年月を経過し、扱て再着手となって、塑像の計画などが持上り、偶々檼下の腐朽に気がついて、その対策を樹ることとなり、仏壇や龕を一旦破却の上新しく改造することになったのではなからうか。かくして引続き壁や天井が造られたと考えることは出来ないであろうか。その場合放置されていた年数は檼の腐朽のきざしを見せ始める迄の年数であり、柱の風蝕のあれ程に生じた間の年数でなくてはならず、少くも、数十年の年月を見なければならぬことになるであろう。従つて若しこの考察に誤なくば、塔の建立着手は塑像の造られたという和銅四年を遡ること少くも数十年を見なければならぬこととなる。」

このように、塔の檼（しんばしら）の足元が、その底に礎石が据えられている空洞のなかで、腐朽のきざしを見せるかなりの長年月間、初層の壁や天井が作られずにその儘放置されていたとすれば、この塔の状態のままでは、たとい、大工仕事の大略が終ってしまったとしても、その時期をもって、これを完工年代と見做すということは、到底なしえないのであるまいか。やはり、仏壇や龕が新たに改造され、引続き

壁や天井が造られたその時期を、この塔の完工年代と考えるべきであろう。

では、この仏壇や龕が新たに改造された時期は、はたして何時ごろであろうか。ここで、法隆寺資財帳に見えている五重塔塑像群の、和銅四年という造像年代が(註二〇)、あらためて注目されてくることになるのである。なぜならば、仏壇や龕の新たな改造は、当然、仏壇と相関的な須彌山の改造を伴うものであるが、この須彌山の峨々たる山岳下の舞台に、仏伝の諸景を展開する群像たちこそ、まさしく、この和銅四年造像の塑像群に他ならないからである。即ち、この塑像群の造像年代は、とりも直さず、須彌山や仏壇の改造された年代を示すものであり、それに前後して行われたものと推定される。壁や天井の制作年代を、さらに示唆するものである。五重塔初層の壁や天井に、彩画がなされていたことは、すでに、顕真の、聖徳太子伝私記亦名古今目錄抄に(註二二)、内陳在三組入天井。裏板書カガリ反花。組入子ニハ漆スレリ丹。壁ニハ繪ニハ菩薩形立像。

村田博士の云われるような、「塑像や壁画などの完成をふくまない」法隆寺五重塔の完工年代というものは、まず考えられないことになるわけである。

このように、長期間にわたって、内部工事が放置されたままになっていた未完成の五重塔は、腐朽のまじしを見せていた心柱の対策を契機として、ようやく和銅年に至って、仏壇や龕の改造、内部工事の再開というふうに、五重塔造営工事の最終的段階に入ったということになるのであるが、この時期は、恐らく、何らかの理由で、法隆寺伽藍そのものの完成が急がれ、それまで停顿していた造営工事が、にわかに進捗を見ることがになった時期と思われる。法隆寺資財帳に見えている(註二二)、

合塔本肆面具一具涅槃像土一具弥勒像土
右、和銅四年歲次辛亥、寺造者、一具維摩詰像土一具分舍利仏土

合金剛力士形貳軀在中門

右、和銅四年歲次辛亥、寺造者、

という記録は、五重塔と中門との最終的な完成が、ほとんど同時であったことを、十分に示しているのであるが、建物自体の規模も、恐らくは、起工年代も相違していたであろうこの五重塔と中門が、全く同年代に完工したということには、それ相応の理由と事情によって、一定の期限をめざして、両者の造営進捗工事が、眼覚ましく進められたことを、十分に示唆するものといえよう。このことは、恐らく当時の人びとに、法隆寺成る、という鮮明な印象を与えずにはおかなか

たのであろう。

真福寺文書所謂七大寺年表における(註二三)、

和銅元年戊申。依_レ詔造_二大宰府觀世音寺_一。又作_二法隆寺_一。

また、伊呂波字類抄における(註二四)、

法隆寺七大寺内也。和銅年中造立。

という記録は、なによりも、この間の事情をよく物語りえて
いるものと思われる。

なお、会津八一博士は、天智天皇九年(六七〇)の旧法隆寺の焼失を信じない立場からではあるが、ここに見えている「作」「造立」を、「營繕」の意に解して、

「和銅年間に入って、かなり大規模な營繕工事が、此の伽藍のこゝかしこに行われた。」

ものと、述べていられるが(註二五)、少くとも、和銅年間に入って、これまで、長期間放置されていた五重塔の造営工事も、いよいよ本格的に、最後の仕上げを急ぐことになったであろうことは、十分に考えられるところである。

私は、法隆寺五重塔は、金堂の完工後間もなくに着工され二、三十年を経た和銅年間に完工されたものと推考する。

さて、私は、法隆寺資財帳に見られる持統朝施入が、塔の完工と無関係であること、また、塔の完工は和銅年間と見做されるべきこと、という二つの前掲理由から、法隆寺五重塔完工年代を、持統天皇七年(六九三)に擬する、村田博士の御説に対して、疑義を呈す結果になったのであるが、もし、ここで、博士のこの年代観が崩れることになれば、当然のこ

ととして、この持統天皇七年(六九三)と比べて、法起寺の三重塔は、「文武天皇の慶雲三年(七〇六)の完成であるから、法隆寺五重塔はそれ以前の建築であることが考えられる。」とする博士の御説は、その根拠を失うことになる筈である。(もともと私自身は、法隆寺五重塔の起工年代を法起寺三重塔の天武天皇十三年より若干早いものと見ている。)

すると、残された問題は、直接、この両塔の建築細部を比較した上で、様式年代の新旧を判断する以外にはないわけであるが、その点に関しては、さきに、「法隆寺五重塔と法起寺三重塔とは様式が同じ系統であるが、後者のほうが洗練されていると見るのは建築史家の常識」である、という博士の見解が示されていることは、すでに見てきたところである。

ここで、とくに読者の注意を喚起しておきたいことは、法隆寺、法起寺両塔の比較に際して、法起寺三重塔のほうが、法隆寺五重塔より、洗練されているので、年代が新しいという見方をしていることである。こうした比較の仕方は、すでに指摘しておいたように、玉虫厨子と、法隆寺金堂との比較の場合にも、なされていたわけである。即ち、玉虫厨子の宮殿にみなざる洗練された作風は、法隆寺金堂よりは、法起寺三重塔のそれに相い通うものである、というのである。

博士が云われるように、法隆寺系建築のなかで、法起寺三重塔が、もっとも洗練されているという見方は、確かに、先学建築史家に共通した觀察といえるであろう。

例えば、天沼俊一博士は(註二六)、この塔について、

「細部に於ては、柱・雲料栱等何れも飛鳥時代の標本たる法隆寺堂塔の夫れ等に比べてみると大分に洗鍊されてゐる。

そして各重軒の出が深く屋根勾配は緩いので非常に安定に見える。今日に残つてゐる所有三重塔中では此塔が最も恰好がよく、かゝる塔をつくるには建築術も餘程進歩してゐた事に分る。

故に初めに述べた通り慶雲三年説も遽に否定は出来ぬ。前時代の遺風の頗る濃厚であつた中で当寺が建立されたと考へれば、細部の極めて洗鍊された純飛鳥式のものが出るのは蓋し当然であると言へよう。」

と述べ、また、関野貞博士も(註二七)、同様に、「其の構造形式は法隆寺五重塔と同様であるが、柱は彼より稍繊細となり、雲形肘木や雲斗の手法は彼よりは洗鍊されてゐる。之は年代に於て彼より稍後れてゐることを示すものである。茅負の上に裏甲なく直ちに瓦座を作つてゐるのは古制である。」

(中略)

此の塔は其の細部が法隆寺堂塔に比し一段洗鍊されてゐるのみならず、各層減縮の度多く軒の出深く屋蓋の勾配の緩なるがため、最も奇抜雄勁なる輪郭を作り出し、我が国三重塔中最善の権衡を示してゐる。」

即ち、諸先学が、法起寺三重塔をして、他の法隆寺諸建築よりも年代が下るものと見做される所以は、少くともここに

示されているかぎりにおいては、この塔の、柱の繊細化、雲形斗栱の手法的洗鍊化、軒出の深さ、屋根の勾配の緩かさ、などによつてであるが、いま、村田博士が、こうした法起寺三重塔の諸特徴を、そのまま玉虫厨子のそれに相い通うものとして、とくに指摘してゐられるのは、雲形斗栱に見られる形式の特徴なので、ここでは、はたして、この法起寺三重塔の雲形斗栱が、玉虫厨子のそれと、全く様式年代を同じくするものであるか否かを、検討するにとどめたいと思う。

まず、村田博士が、玉虫厨子の雲形斗栱をして、法隆寺金堂のそれより洗鍊された作風と見做される理由は、極同様に「雲形斗栱にもまた反りがついて軽快さが加わつた」という点にある。たしかに、玉虫厨子の様式年代を見る上では、この反りは、玉虫厨子にとっては、逸することの出来ない重要な形式の特徴であり、法隆寺金堂の雲形斗栱との間の様式対立を示す、好箇の例として、私自身、すでにこの点については、十分に指摘してきたところである(註二八)。もつとも、私の場合は、玉虫厨子の様式年代を、法隆寺金堂のそれよりも、なお遡上るものと見做す一論拠としてあげていたのであり、その点は、博士の御説の帰着するところとは、全く対立する旨、さきに断わつておきたいと思う。

さて、ここで疑問が生ずる。というのは、かように、村田博士が、玉虫厨子の細部をして、洗鍊された作風と見做される所以は、玉虫厨子の極や雲形斗栱の反りを重視なされてることであるが、しかし、天沼、関野両博士が、法起寺三重塔

の雲形斗拱を、法隆寺金堂のそれよりも、洗練されていると目されているのは、決して、この塔の雲形斗拱の反りによつてではない。法起寺三重塔の、極にも雲形斗拱にも、もともと反りはないのである。いま、法隆寺金堂の雲斗拱のことはしばらく措くが、直接に、玉虫厨子と法起寺三重塔との雲形斗拱を、それぞれ比較して見た場合、はたして、この両者の形式の特徴は、全く同じものと云いうるであろうか。反りのある三手先様の玉虫厨子の雲形斗拱と、法起寺三重塔における水平の二手先雲形斗拱とは、すでに輪郭の上に、はつきりした相違を示している筈である。それにも拘らず、この両者を、ともに、法隆寺金堂の雲形斗拱の洗練された形式として、全く同様の様式年代に並べておくということが、はたして妥当であるか否か、疑問なしとしないのである。

玉虫厨子の雲形斗拱が、法隆寺諸建築のそれに比べて、いかに特異な形式を示しているかについて、いまま少し細心の注意が払われてしかるべきであるが、この点に関して、かつて、伊東忠博士は、玉虫厨子の雲形斗拱を縦に置いた、その輪郭及び曲線の性質は、明らかに、法隆寺金堂の天蓋隅金具のそれと同型であり、その起源は、同じく忍冬文様にある旨提起なされたことがある(註二九)。伊東博士が云われるように、玉虫厨子の雲形斗拱の輪郭や曲線の性質が、忍冬文様から由来したものであるか、否かについては、しばらく検討を保留しておくとしても、玉虫厨子の雲形斗拱の形式的特徴が、法隆寺金堂の雲形斗拱に比べて、きわめて特徴的である

ことは、十分に指摘されていることになるであろう。この両者では、輪郭は勿論のこと、曲線の性質、そして形体感(法隆寺金堂、塔の斗拱底面には、薬師寺東塔と同じく、繰出しが隆起している点に注意)も、決して同一ではない。

玉虫厨子と法隆寺金堂との、この二つの雲形斗拱の間に、様式対立を全く認めようとなさらない村田博士への疑義として、私は、本誌前号において、次のように疑義を呈してきたのであるが(註三〇)、その見解は、いまま訂正を要しないので、再び批判を乞うべく、再録しておきたいと思う。

「要するに漢魏以降法隆寺建築に至るまで、各時代各様の彎曲斗拱が見られたわけであり、そこに一定したモチーフが踏襲された形跡は、かならずしも見られないように思いますが。それ故、こうした彎曲性斗拱を、浜田耕作博士が、いみじくも、

『法隆寺に見る様な、雲斗、雲形肘木の如き複雑なる「空想形式」(Fancy form)』

と呼んでいられるのは、まことに当をえたものと思われます。こういうわけでありますから、今日こうした彎曲性斗拱を、一概に雲斗拱と称してはいるものの、玉虫厨子と法隆寺金堂との雲斗拱を、かならずしも同一のモチーフ同一形式の雲文様と決めてかかる根拠はないように思います。

事実、玉虫厨子と法隆寺金堂との雲斗拱を、入念に比較してみますと、法隆寺金堂のそれには、その側面に渦が彫りつけてあり、この雲文様は、かなり自然主義的な趣をもつてい

るのでありますが、玉虫厨子の方は、むしろ抽象性が強く「空想的形式」の呼称に、よりふさわしく見えます。なお、法隆寺金堂の栱は、彎曲しているとはいへ、大体において水平を保っていますが、玉虫厨子の場合には、法隆寺金堂のそれと比べて、彎曲性が強く、尾極を追い上げてゆくような撓みを見せております。この点、玉虫厨子の斗栱の方が、法隆寺金堂のそれより、漢魏の伝統への近さを思わせるのでありますが、如何でありましょうか。」

このように、私は、玉虫厨子の雲形斗栱における反りの有無を、大変重要なものと考え、法隆寺金堂の雲形斗栱との間に、明らかな様式対立の存することを、指摘してきたのである。

伊東忠太博士の、玉虫厨子雲形斗栱の忍冬文様起源論も、この反りを重要視されての発想と見做して差支えないのであるが、この忍冬文様起源論が、はたして妥当であるか否かに關しては、私は、玉虫厨子の乙類文様（伊東博士は、玉虫厨子に用いられている文様のうち、忍冬文であることの明らかなるものを甲類文様、然らざるものを乙類文様と呼称されている）の起源を、分立爬虫唐草文様におく小杉一雄博士の、忍冬文様起源説批判の御説に（註三一）、加担しておきたいと思う。

勿論、玉虫厨子の雲斗栱の形式的特徴は、その輪郭に關しては、決して、厨子の飾金具に見られる乙類文様と、そっくりその儘同じというわけにはゆかないが、少くとも、玉虫厨

子の雲形斗栱の反りの示している曲線の性質は、やはり、分立爬虫唐草文様のそれと見做して差支えないのではあるまいか。

なお、この分立爬虫唐草文様は、小杉一雄博士の考証なきところでは、前漢末には、すでに、その基本様式は、ほとんどその形成を見ていたということであり、玉虫厨子の雲形斗栱の反りが、こうして、分立爬虫唐草文様の曲線の性質を継いでいるものとすれば、玉虫厨子の雲形斗栱の方が、法隆寺金堂の雲形斗栱よりも、なお漢魏の伝統への近さを思わせるものがあると私の説は、いよいよ明白な裏付けをえてくることになるわけである。それゆえ、玉虫厨子の雲形斗栱の反りを目して、かえって、玉虫厨子の年代引下げの証左と見做していられる、村田博士の御説に對しては、とうてい贊同いたし難いのである。

次に、極の反りについてであるが、すでに指摘しておいたように、玉虫厨子の極の反りは、その枝外極において、きわめて明らかに示されているように、極が、凹曲線の勾配を描く屋根の裏面に、びったりと貼り付けられているところから来た、全くの工芸品だけに可能な曲線である。即ち、ここでは、極は、本来の構造的機能を問われることなしに、意匠化されているのである。それゆえ、極の反りの有無をもって、様式年代推定の根拠とすることは、全く無意味といって差し支えないであろう。

むしろ、玉虫厨子の極の反りに關して、様式史として問題

になるのは、極自身ではなく、極に反りをあたえている屋根勾配の凹曲線についてであろう。もっとも玉虫厨子の場合、屋根は、鍔葺の形式であり、したがって、屋根全体の勾配は二段傾斜の凹折線をなすのであるが、切妻線の身舎の部分も、庇の部分も、それぞれに緩かな凹曲線を描き、極も、二段に切れて、それぞれの勾配曲線に応じた反りを見せているのである。では、玉虫厨子に見られるこうした凹折線曲線とでもいふべき鍔葺の屋根の勾配は、様式史的には、どのような意味をもつのであろうか。

こうした問題に関して、谷口吉郎氏は、その近著のなかで（註三二）、屋根勾配の凹曲線の発生について、Fergusonの説を紹介しながら、次のように述べている。即ち、

「それは、母屋の屋根と庇との結合から生じたものであるとする説である。母屋の屋根が急勾配であるのに対して、庇の屋根は傾斜がゆるいので、それを結合した場合、初期には凹折線すなわち直線を折った形であったのが、次の時期ではそれが曲線に連結されて、凹曲線になったのだという主張である。これは構造的理由に基づき、しかも中国や日本の建築の実際にも適合しているので、かなり信用されている。

たとえば、それを家形ハニワに当てはめてみると、初期の屋根は切妻であり、中期頃に鍔葺しころぎが出現している。すなわち屋根は母屋と庇の二段の傾斜になり、従って凹折線である。更に四注（寄棟）も現われてくるが、それに庇が付属してくと奈良県の三宅村出土の家形ハニワの如く、凹折面は連結

されて、凹曲線となっている。

このことは、仏教伝来によって、一層判然となった。」
として、法隆寺金堂母屋造の全き凹曲線の発生について述べられている。

法隆寺金堂の入母屋造の凹曲線は、すでに見てきた玉虫厨子の、凹折線様曲線とでもいふべき鍔葺の屋根の勾配から、様式史的必然さをもつて、導き出されるものといえよう。鍔葺形式の基本形は、当然、発生的には、直線の段落継起する凹折線を示していたのであるが、玉虫厨子の鍔葺形式は、そうした原形的凹折線から、入母屋造の、完き凹曲線に転移する、契機的な先行様式と目されるのではないだろうか。

そういう様式史的な意味において、私は、玉虫厨子の鍔葺形式を評価し、玉虫厨子のこの凹折線様曲線の屋根の勾配と法隆寺金堂の凹曲線の屋根の勾配との間に、はっきりとした様式対立の存在を見出さざるをえないのである。即ち、玉虫厨子に見られる極の反りは、もともと、村田博士によって、玉虫厨子の制作年代を、法隆寺金堂の再建年代よりも繰下げべく、その証左として提出されたものであるが、これは、かえって、玉虫厨子の屋根の凹折線様曲線が、法隆寺金堂の凹曲線の先行様式をなしていることを、示唆する結果になったのである。

なお、玉虫厨子の鍔葺形式については、私自身すでに、その様式史的意味の大きさを、再三繰返し述べてきているのでその詳細は、既に発表をみた諸論文（註三三）に、譲りたいと

思うが、埴輪家屋に見られる鍔葺形式と、玉虫厨子との関係については、これまで、全く触れるところがなかったので、なおこの点に關しては、さきに村田博士からも、玉簡（昭和三年八月一日付）をもつての御指摘があったので、次に簡単に私見を述べておきたいと思う。

さて、埴輪家屋の形式に關しては、かつて、後藤守一博士が（註三四）、これを、その屋根の型によって、切妻造家・鍔葺造家及び四注造家の三種類に分け、さらに、その形式推移を、切妻造、四注造、鍔葺造の順と推定していられたのであるが、實際の住居建築において、こうした鍔葺形式が用いられた年代については、やはり、博士も、その推定を、玉虫厨子や四天王寺金堂の例に依拠せざるをえなかったようであり次のように述べていられる（註三五）。

「以上の例はすべて寺院建築であり、随つて或は当時新に支那から渡來した構造様式であると主張されるかも知れませんが、この大和外山例（奈良県磯城郡城島村大字外山^{そび}出土の鍔葺造家を指す一筆者）を典型的のものとする一群の屋根の構造と酷似してゐるところを見ると、この外山例のも鍔葺造とし、これが家屋文鏡（奈良県北葛城郡河合村大字佐味田古墳出土の仿製鏡一筆者）の例から見て、尠くも西紀三四世紀代に於ては、我國の民家にすら行はれてゐたものであり、飛鳥時代に於ては、寺院にすらこれが用いられたのであると解してよいかと思ひます。若しこの飛鳥時代の寺院建築の方は新來のものであり、上代のものを受けたのではないと主張さ

れるならば、尠くともこの飛鳥時代の鍔葺造に似たものであり、これを瓦葺にせず、草葺としたのが埴輪家に見るものであるといつてもよいと思ひます。」

たしかに、後藤博士のこうした御説のように、三、四世紀の我が國において、略々、今日の埴輪家に見るような鍔葺造様の家屋が、すでに一般の住居として存在していたであろうことは、私も、十分に推察しうるところであるが、しかし、仏教初伝当時の寺院建築における鍔葺形式が、かりそめにも同時代の民家の鍔葺造様の影響によつて成つたものと考ええることは、全く出来ないものと思われる。

なぜならば、まず第一に、仏教初伝当時における、所謂推古伽藍は、徹頭徹尾、朝鮮三國の直模様式であり、一般の住居建築との間に、様式的に、相互交流するものは、何ものもありません。第二に、それを実証する例として、昭和十二年三月、朝鮮扶餘郡窺岩面外里の一丘陵から、鍔葺の家屋（十分に寺院建築と想像されうる）が描かれてゐる文様画墻が、實際に、百濟時代の遺品として出土されてゐることである。第三に、古墳時代以来の伝統様式を継ぐ草葺の民屋建築と、朝鮮三國直模の瓦葺の伽藍建築とは、たとい、屋根の型が、同じ鍔葺形式とはいへ、材料において、構造において、また外觀において、大きな懸隔があつたであろうことは、例えば、家屋文鏡の鍔葺造家屋と、天寿國繡帳にある鍔葺の鐘樓図とを比較しても、あまりにも歴然する事實のようである。要するに、飛鳥寺草創の例に俟つま

でもなく、仏教初伝当時の推古伽藍建築は、外来工匠や帰化人たちによって、全く庄惻的な勢いで、たちまちその建立を見たということの認識が、この際、何よりも必要なことと思われるのである。

むしろ、埴輪家屋について、様式史的に重要に思われるのは、これはすでに谷口吉郎氏も指摘されているところであるが（註三六）、たとえば、さきに鏡葺造家の例としてあげられていた奈良県外山出土の埴輪家に、軒の反りや、隅棟の反りが認められることである。とくに、同じく奈良県三宅村出土の四注造埴輪家には、きわめて美しい、屋根勾配の凹曲線と軒の反りが見られるのである。即ち、こうした工芸的表現をとおしてではあるが、古墳時代の後半になると、ようやく家屋の曲線的な美しさに対して、日常的な生活感覚がひらかれてゆく証左が、ここに現れてくることになるのである。これを、寺院建築の影響と見做すか否かは、さほど問題ではない筈である。なぜならば、何れにしても、こうした造形感覚乃至は技術が、朝鮮や中国の帰化人によって、伝えられたであろうことは、言を俟つまでもないからである。

以上、私は、主として、玉虫厨子の雲形斗拱の反り、及び極の反りの様式史的意味について、私見を述べ、こうした玉虫厨子細部の形式的特徴を洗練された作風と見做し、その洗練された作風ゆえに、あえて、玉虫厨子の制作年代を、法起寺三重塔の建立年代に擬する、村田博士の試みが、いかに根拠の薄弱なものであるかを、不躰をかえりみず、ここに指摘

してきたつもりである。

なお、最後に附言するならば、今回、村田博士によって、洗練された作風ゆえに、その制作年代を、奈良時代の前夜にまで引き下げられている玉虫厨子も、かつては、その洗練された作風ゆえに、尊敬する幾多の先輩によって、まさしく、百済や梁からの舶載品として目せられ、あえて疑われるところがなかったということを、指摘しておきたいと思う。稚拙とか洗練という吾人の印象が、様式史的なものの見方の上でいかに不安定なものであるか、あらためて、思いをここにいたさざるをえないのである。

擱筆するにあたって、私は、玉虫厨子の建築的意匠に関して、なお論証し残されている問題の少なくないことを痛切に感じる。まずその第一は、玉虫厨子の仏龕形式についてである。しかし、この問題は、玉虫厨子の装飾的意匠、そして何よりも、その信仰形式と、密接な関係を有するので、あらためて、この困難な問題を説明する機会をえたいと思う。

なお、この問題と関連して、一言、ここに言い副えておくならば、今日、玉虫厨子制作年代の論証を困難にしている原因は、要約して二つある。その第一は、玉虫厨子の様式年代が問われる場合、そのジャンルが多岐にわたること、第二はしかも、その一つのジャンルにおいてすら、様式史観が確立されていないこと、である。

それゆえ彫刻・絵画様式と全く無関係に、建築様式の検討のみで、玉虫厨子の制作年代を推定するということは、玉虫

厨子の様式史的成立条件を考える上で、きわめて非現実的と云わざるをえないのである。かりに法起寺三重塔に比定されて、玉虫厨子の建築様式年代が、白鳳末期に落着いたとしても、はたして玉虫厨子絵の様式を、この年代に擬することが出来るであろうか。様式史的現実は、関係ジャンルすべてに對して、全き論証を要求してくる筈である。

また、玉虫厨子の建築様式年代の解明に際しても、細部個々に對する恣意的検討ではなく、まず飛鳥、白鳳、奈良各時代それぞれの時代様式性が確立された上で、玉虫厨子細部の形式的特徴を、その各時代の様式的特徴に照して、それぞれの様式年代に帰納させてゆくという実証的、かつ論理的手順を踏むことが、厳密に要求されてくるのである。もし、玉虫厨子の制作年代が、白鳳末期に擬せられるならば、そこに当然、葉師寺東塔、或いは海竜王寺五重小塔との、様式対立の検証が要求されてくる。玉虫厨子をして、法隆寺系建築に属せしめる旧来の様式觀に疑義をいだいた私が、まず最初になしたことは、法隆寺様式との間に明らかな様式対立をもつ先行様式が、はたして存在しえたか否かの検証であった。その結果、私は、仏教初伝時代の伽藍建築を、朝鮮三国の直模様式と規定し、これを四天王寺系建築と名称しておいたのである。玉虫厨子細部の形式的特徴は、この四天王寺系建築の様式的特徴を十分に示しているのである。それゆえ、私は、玉虫厨子の様式年代を、法隆寺金堂の建立年代以後と見做すことは、到底、出来かねるのである。

玉虫厨子の建築様式年代の解明も、結局は、これまで、あまりにも不正確に放置されてきた、所謂飛鳥様式に對して、大膽かつ細心に、新たな様式史的照明をあたえること以外にはないようである。(昭和三五、九、一〇)

追記 本稿校正中、奈良博物館の稻垣技官より、この夏の法隆寺発掘調査の結果を伺うことができた。それによると、法起寺の伽藍配置は、法隆寺式を逆にした所謂高麗寺式と目してしかるべく、従って村田博士の「三重塔の西北に金堂跡がある型であつて、高麗寺式とは全然異なる」(新著三六頁)との御説には、当然疑義が生ずることになった。なお発掘金堂址の西に隣接して、若草伽藍址様の方位をもつ旧伽藍址が発見されているので、今後の詳細な報告に注目したい。

(註一) 既出「法隆寺の建築」五一頁

(註二) 玉虫厨子舶載説の嚆矢は、百濟説の伊東忠太博士、梁説の関野貞博士と目してよいであろう。伊東忠太「日本建築の研究」上(昭和一二、三)に収録。最初の発表は東京帝國大学紀要工科第一冊第一号(明治二六、一) 関野貞「日本の建築と芸術」(昭和一六、二、二〇)二〇頁

(註三) 村田治郎「玉虫厨子は何処で作られたか」(「仏教芸術」二号所収 昭和二三、一一)

(註四) 既出「玉虫厨子制作年代考」(「玉虫厨子の制作地について」一六頁

(註五) 小原二郎「古代木彫の用材について」平凡社 世界美術全集月報一七号(昭和二七、一二、二五)一九頁

(註六) 既出「日本書紀」(一) 一一二頁

(註七) 法起寺三重塔の露盤銘をめぐる論争は、喜田貞吉、関野貞博博士の左の論文によって、惹起された。

喜田貞吉「法起寺及法輪寺塔婆建築年代考」(「歴史地理」第七卷第五号 明治三八、五、一〇)

関野貞「法起寺法輪寺両三重塔の建築年代を論ず」(「建築雑誌」第二二三号 明治三八、七、二五)

なお、会津博士の左の論文も逸することは出来ないであろう。

会津八一「法起寺塔婆露盤銘文考」(「会津八一全集」第一卷所収 昭和三三、一一、二三) 最初の発表は「東洋学報」(昭和六、三)

(註八) 既出「法隆寺の建築」二三頁

(註九) 顕真「聖德太子伝私記亦名古今目録抄」(高楠順次郎、望月信亨共編「聖德太子御伝叢書」所収 昭和一七、九、三〇) 一一六頁

(註一〇) 既出「日本書紀」(四) 二〇九、二二二、二一六、二二二〇、二二三頁

(註一一) 既出「上宮聖德法王帝説」(「聖德太子御伝叢書」四八頁)

(註一二) 既出「法隆寺」二二、二三頁

(註一三) 既出「大日本古文書」(一) 五九三、九九六頁

(註一四) 法隆寺再建非再建論争史を回顧してみると、この法隆寺資財帳にみえている持統朝施入の記録は、最初はかえって、非再建論者が、再建論者の和銅再建説を駁する有力な

証拠として用いていたことがわかる。

即ち、平子鐸嶺氏の「法隆寺草創考」(国華一七七号所収 明治三八、八、二) 然り、また関野貞博士の「法隆寺金堂塔婆及中門非再建論」(史学雑誌第一六卷第二号 明治三八、二) 然りである。その理由とするところは、いまでもなく、法隆寺の天智朝九年の罹災を認めるならば、そうした焼失伽藍への持統朝施入はありえないとするのである。この主張は、確かに、再建論者が七大年表や色葉字類抄にみえている和銅造立の記載に終始するかぎりには、論理的に妥当と云わざるをえないわけである。

その後、昭和一四年の若草伽藍発掘によって、法隆寺の再建は、ようやく動かしたい事実として、ここに論争は新たな展開にむかうのであるが、その直前、足立康博士の法隆寺新非再建論に対してなされた、喜田貞吉博士の反駁論「今の法隆寺伽藍は焼失後の再建」(歴史地理第七四巻第一号) では、この持統朝施入は、法隆寺金堂が、このときまでに再建されたことを示す証拠として、挙げられているのは、注目される。かくして、

「今の法隆寺の主要伽藍は天武天皇の御代の中頃に着手せられ、持統天皇七年の頃までに金堂先づ成ったと解すべきもの」という、法隆寺金堂の持統朝再建説が、ここに成立して行くのである。

(註一五) 既出「日本書紀」(四) 二〇五頁

(註一六) 既出「大日本古文書」(一) 六〇一頁

(註一七) 亀田孜「金堂壁画と塔壁画」〔総観法隆寺〕所収 昭
和二四、一〇、一) 一六九頁

浅野清「法隆寺建築緑観」(昭和二八、九、一) 一三二頁

(註一八) 前出 一三二頁

(註一九) 同 一〇五頁

(註二〇) 既出「大日本古文書」(一) 五八二頁

(註二一) 既出「聖德太子伝私記亦古今目錄抄」〔聖德太子御伝
叢書〕所収) 一〇二頁

(註二二) 既出「大日本古文書」(一) 五八二頁

(註二三) 「続群書類従」第二七輯 四六六頁

(註二四) 日本古典全集「伊呂波字類抄」十卷本第一 二九

(註二五) 会津八一「法隆寺建立年代私考」〔会津八一全集〕第
一卷所収 昭和二三、一二、二三) 一七七頁

(註二六) 天沼俊一「日本建築史要」(昭和二、八、二五) 四二頁

(註二七) 関野貞「日本の建築と芸術」(昭和二六、六、一五)
一八五頁

(註二八) 拙稿「玉虫厨子における鏡畫形式の様式史的意味につ
いて」〔成城文芸〕二二号 昭和三五、七、一五) 四五頁

(註二九) 伊東忠太「法隆寺」(昭和一五、一一、一〇) 一三六頁

なお、「玉虫厨子の文様と其源流」は「仏教美術」第一
三冊「玉虫厨子の特殊研究」(昭和四、六) 五七頁

(註三〇) 既出「玉虫厨子における鏡畫形式の様式史的意味につ
いて」四五頁

(註三一) 小杉一雄「中国文様史の研究―殿周時代爬虫文様展開
の系譜」(昭和三四、五、三〇) 一六八頁

(註三二) 谷口吉郎「日本建築の曲線の意匠・序説」〔日本文化
研究〕第八卷所収 昭和三五、七、一) 四〇頁

(註三三) 拙稿「玉虫厨子の作期について」〔美学〕三五号 昭
和三三、一二、二二) 一三頁

既出「玉虫厨子制作年代考―建築的意匠より見た玉虫厨
子の様式年代」〔成城文芸〕二〇号 昭和三四、一一、三
〇) 六六頁

既出「玉虫厨子における鏡畫形式の様式的意味につ
いて―村田治郎博士の疑義に答える―」〔成城文芸〕二二号
昭和三五、七、一五) 三一頁

(註三四) 後藤守一「埴輪家の研究」〔日本古代文化研究〕所収
昭和一七、四、二五) 一五〇頁

(註三五) 前出「上代時代の住宅」二〇六頁

(註三六) 既出「日本建築の曲線の意匠・序説」三三頁

研究」第八卷所収 昭和三五、七、一) 四〇頁

拙稿「玉虫厨子の作期について」〔美学〕三五号 昭
和三三、一二、二二) 一三頁